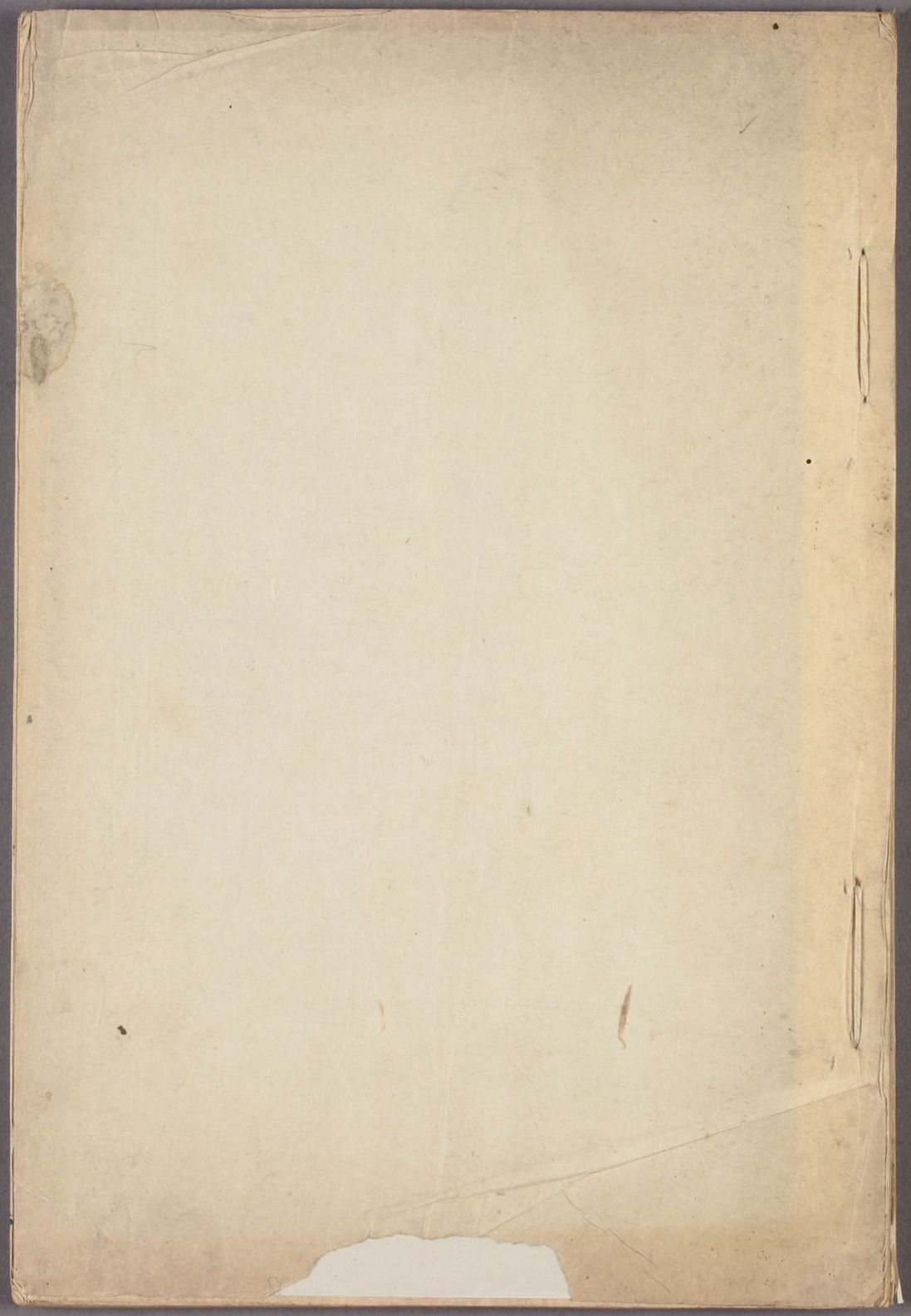

炭俵

折聽

此巻も 青蓮の注を書抜たるものと
おもふて たゞし誤も多ひらへくあも
なれども 青蓮と云はて 獨得とおもはる
此本 青蓮云と云て
慶応二年十二月十九日 後高

炭俵

序

丸のきとをひらき、 大鏡の慎相如か句に朝閑丸窓夕汲心泉、又花十二窠宴居魯云々

菴を永にロをほけ 宋人云、 荘子 ○上ゝ未詳

金屏の松の古さよ

有声の絵 大鏡に王維いとく 詩有声画無声詩

詩の正義にいつゝの名 毛詩序 先王以是経 夫婦成孝敬云々正義云

例の口にまかせたるもあず 青蓮云 貞風淡秀俳諧をそなる

くゝぬき炭のふる事 大鏡に堂前の桜 ちぎりあれやとしらなみ山のふしくぬき 友となるゝ

獨こゝ

角のこ

小子　此節カキタル書意ニ

云指ニ物ノ小ナ　者カニ

上巻

上のたゞりに　来相場アリ　刈間ヲアレバ　暫請スル之

雪の内はらく〻と　秋ノ住吉行ノオタヤカナラズニテ上方ニテモ　来タラザリシ名之

藪蚊はあす　よひのうちとは雨もふりたるに　月まみわたり　ちるを　見みやりて　詩歌と

藪蚊には　もしもぞ　する之

はち頭に　紅白ふたの　藪蚊　ものがたりする之

娘を　堅う　菊八　(後略)　ものにて　愛ス　八　齋百人　たゞ　せば　軽薄　なる　家風之

奈良がよい　奈良ニ　遊女町アリ　木辻ト云、　カルモノトモガ　娘ニアハントテ　車ニ　詩ヲ　多集フ之

こゝは　其キモノトモ　淀ナガラ　奈良ニ　面ノ　ハナシナドスルニ　後ニテソレヲ　知ラヌスガタニモテナシ　雨フラヌ

預けたる　暑サヲ　カカシテ　他ヲリカ　(リキタリ　タルサマニ　雨フラヌト云フ　ヨリ之)

ひたといひ出す　ヒメハ　一向ニ　一筋ニ之　考ノスカタ之

ものがたり　看病ニ　ナカラ　我母ノ　持病ノ　ヒヒヒヒ　云又之

えびらく　其看病人　夜ヲ　容易ニ　ナラズ　物多クハントテ　食物ヲ　尋スルニ　イザカコンニヤノコリ

テアル　曉方ノサマニ

はつ〻に　翌朝　旅ヌシトテ　酒盛ニテ　曉チカヲ　ナレバ　誠ニ　肩途ノサマヲ　シテ　ヒル也

霜をおそれ　旬ノ　酒肴ニ之　曉方　庭多ノ　草ヲ　相手ニ之

町　夢の　花ノ下ニ　居ヲ　ヒテ　酒盛ニテ　戯ニ　庭人　多ク也　所柄ハ　所　往人ナトナレバ　一面ノ　所ノ人ニ

アルマシキ　壬生寺ノ　附ニテ　ヨウ

門に　壬生寺ノ　境内ハ　花ノ下ニ　酒盛ニ　ナカラ　門ニテ　交渉ノモノ　詩集スルヲ　見ヌ之　法隆寺　五條坊門

東風くに　朱花ノ　東ニ　ヨリ　名年　三月　十四日　ヨリ　世間ガヤデ　金仏アリ　コレヲ　壬生金仏ト云

壬生寺ノ　サマ　ナリ

たゞ居　家の田舎ノ世ヲ引とりたゞ〳〵休みとやハ眼イタムニ昔折角ノ孝慈ニ

江戸の花　カヒナ帝百姓ノ宅シタ者モフニ

こゝろ　江戸ノ花ハキカヘル向ノ家ナレバカシアヤル

方に　初旧ノ月ノイツカシキ十月比ニ十枝ハ十月也

相の木　冬ノ寒気二十夜トシヨリ

問しめて　相の木ハかくさえたる月もさむく冬ねばこそ

ひらた金七　独身者ノ妹ニ問しめたる貧窮姫柏ノサマ

はつ午に　はつ午金ニテ家中イワクノ取トノ夕ベニ外ヤトハ親ハ子ト云フニアラズ

またの春も　家ノ主ヲ浪人トニナス也

法印の　浪人ハ身自由ニテ法印ヲ医ル

なはまと　法印ヲ医リ行テ口ノ青麦ヲ出ル

ゞの家も　田舎モキニ

魚に喰　ドノ家トハラ獄帥町トモトラ之

千鳥啼　奥新水ニクヒアキ医ヒ世ウナバ用年ハヤクヒマヒテ力ワタンニ

未近の　千鳥ナキ冬ノ夜ニ未近多クテ窮用ス貧家ノサマニ

清〳〵と　未近ノハラメ貧家ハ心ヒ〳〵ニ

屏風の　貧家ハ栖菊ヒナ多ク事ヨリ

以上三十六句

○三吟　嵐雪、利牛　野坡　ヲミ人ノ吟ニ

蕉翁　花ヲリ花ヲ活ノイトナヒ文ヨニモ文学味フ〳〵貧ノキトウヲ之　○評ニ別ニ云

あさみや　一説ニ蕉翁ヤ芭ノ桑ニ在指モル之一説アサヒヤ地名トシ、朝倉山板　煙西大根ノ数カ
但イヒ地名ニカ、サテ在指トハ江鮒ト云魚、腹ニ飯ヲ多クハ入ル、青ノ形ニ似ト之

葉ヒロノ莖ニ在鮨ヲ入レテ蓋ガ人ノ傍ニオクトニ貧家ノスガメ

底みちは 炎中ノ物所ニ在鮨ヲコサヘ食ナガラシカ〳〵云フ 春ニハ道モオヒ〳〵カホルコ

外とがまく 時モナクトカフコ 苟ノ小坂ノ谷ハラニ坪モ多ク植ル相撲場ニ田舎ノサマニ

ほも〳〵と 人気モナキ相撲場ノアル夕月頃 サビシキケシキニ

早稲 秋ノ夜田舎ノケシキ夕月ニソコラ見アリクサマニ

泥染を 苟ノ相モ出ラズ其田ヲノコリタルニ木綿ガドラ水ニタルオクサマニ 鉄氣アル地ハヒヒシタニ鉄気ニテ色ノナキコレヲトロソメト云

あるところに 泥染ナトスル事ト時刻ヲスル之

清かる アチコチイハカニキ時ニ姑ノコトニ折ワロシト思

てう〳〵しても カヒリハ帯ノコトニカヒ問ニ問ニ割ヲ入レル帯之匂寝元禄九年刊本ト云書ニカヒワリノ帯トヲ初アリコノ書ハ行方様ニ青蓮ノ変明ノ説之婦ノ言ニ来ル女ガ婦ノ帯ヲホムル之

里石の 聖護院ハ洛東岡崎村ニアリ里人ハ聖護院ヨリハナレハカリ之田舎人都見物ニ来ル景色ノコトヲ云ナカラアリノ白ヲリカヒワリ帯ヲ見ル女ノスルヲラ〳〵ニヲ田舎人ホムル之

五百のかけと 里石ト聖護院ト向ヒ合ヒ五百ヲ又ハアリン両ヲニ取ト之

綱ぬきの 青蓮ハ昔清水ノ橋ノ辺ニ居タル人ノ雲霞ノ多之ハ昔ハ銭斡ノ多之多ク踊ル

人のさけるを 多ク蓋ヲ通ル所ノ木ノ枝ノ有テ多ク里石ヲ乞シ之

雑役の 女ノ多クヲ雑役ト云ト青蓮イヒ其松ノ陰ニスム家ノ娘之

飯の中な 草ヲカチニイレタル之 雑役ノクラヲアロハ日ノ名取月ノ光ニシテ草ヲカチニイレタル之

漸と 秋風ニキ空月面白ケレハ綺麗之ニシテ銘ヲクフ之

紙袋みては 空ハレタニ眠サメテ外ヲミルカ又夜ライビキカノトニ

幸公の 陽ノウカヒ晝夜ヲシテ起出テ鉦鼓ニシテ力其顔ニシバ星ヲリテアリコハ乞カ其者ニ名ヲ付ケタモノニ戒ニ口ケタル之

拓揚ノ カノ顔ニ星ノ付タモノヲ又男ノナイ宇セントテタキアリ人ハ其子ノ小便スルサマニ

くわたくと 高知ヲ医医セントヲイワカヒニハ中見ヲ病ヒシキ名カ、目サメテ泣キ出ス取ニ タキアリ人ニ小便スル之

心こうん、　物ノ運送スルニ船積問屋カ又ハ旅籠屋ト見ナレサテ門口ニ客ニ用フル箱ヲ
アフヒラホシオクヲコトナリ

婿か来て　親タチハカヽル人ニハアラワリシヲ今ハ箱ヲ見テ又用フルヨシニ

ことしの　親タチハ若ナウサハ去ル者ニハ宝ノ者ニモ物ヲスヽヲ名ハ婿ノ世ニナリモノ之

金仏の　物ハモトネドフノ書守ノフトムハ和ニ来ニモ銭ニモ世ニ出ナシ世ハ本ニソノ陽ウ
イタヽクノアリカタキヨシヲ申スノ之

此ほとけの　鉢ノアマリノ米ナドヲ十四ヲさんこも御仏ノ口ニ入ルヽト御ヲライメ、ウ之

春の穂　風ニ吹例サタハ其穂ヲ飼ニセントテ引クル之

馬場の　来テ見ハ宿場ハスヒテ春ノ穂ヲ吹例ンテアル之

第八　人々ケフトヒラヤヽヒハ彼ハ宿場ヲスルニ多ハ見ニ不快ニヲヒヒテ人ニナリタリト云之

今に花の　オヲ家ノ内ニモ、見ノ花ハ彼ハアレド器疑ナリト之

黄手ヲリ　其花ハ雖多ノ黄手ヲリカヤウニシテモ物数ヒテ賞ス之

ひらりくと　此雲ニコノ鉦ナリトモ黄スハ今日ノアキナヒ之ト之

鎌倉の　降ツモウヌキトモ和僧ヲ便ハ今ヒヲ又ル之

かしこ所の　鎌倉ニ便ハ僧ノアラハ苔ノ逆アレトモ如僧ナリ名称ニモ苔ハセンヲ細引
多ハ之ナリ

物あり　ウアリ人セントテ酒肴ナドヲ初ニ結付シトヲ細引サカス

またかひのこう　ちハくたんへし　五月ノ鎌倉ニ残リタルヲ母ハトニ花見ノ席ニ餅ヲ持テ行之
松上　三十六句

○　二人吞九句　孤屋　山水　利牛　芭蕉

上巻　宝暦現来集ニ寛延宝暦ノ比マデハ婦女ノ雨合羽ハ浴衣ヲ用ヒタルヨシナリ
トノ句ヲ雨中ニ見ナス之

ちとのぞけば　此雨ニ友人ノナニヲヒヲフスカトテ宿カノゾケバ

夜處に　月ノオモシロキニソヘロアリキレフハ友人ハヒヤ夜ヲ二カトノゾケバ清光ヲ衾ニテ汚ス
若干之

どなりと　ソノ陰無風ノ来テ、

きりくす　ナキ出ラ見ヒに姉ノ側シテナナキヤを見ラノコリラこラ出ラこ

晩の仕事の　書ノ仕事ニマヒ見ハ晩ノラ見まん折こきりくスナキ出之

妹をよ亦ル　ソノ文ヲ見セントテ晩ニハナこセントを夫ス之

潛都の　伯父ノ潛都ニトこコノ縁ヲ流ラこうセラヤん

風細う　コノ晩ウマチテ潛都ノもト〳〵之

家のなかに　俳ノ大雨ニ家ナガレタトキ、テコノ晩待テ見ニ行之

鮒汁　家ノナガレヲ見ニユクトテ打ツビヒ物ヲニ人ノ男家ヲトヲ之ナリテハ、ウヒラ（アヤニリカ）

茶の實　サケラハ俳ヲサケラ之減ニ其チ實ニ合ヒモノ鮒汁ラ之

この春は　新茶ノ比ニハ家ガキノ茶ヲヤラ之其比時候ノヨキヲ為ん

かし柳　花を折ニ時候をヨキ枯シ柳ノラ思出ラ惜ム

雲のあと　おぼろ月をみラを枯し柳をおもひ出テ

ふん丸げて　人まテ秋ふん丸げしきおりを之ふしと丸げて晩月をふかめて

不唐お　夫の陶の書ふかはしてゆけばいつまんもか一あをおいてけふん丸げて

はつ子塚を　夫の不幸を胸ふ思かねて市ニ来ツ塚ヲとふ丸げて之ヨかなりて

みくこと　相の更衣毎の哲像のすがたを俳生ヒとふたと之ヒ俳生のまんと

妹をよ亦あくを之相意の口ニヒよいをしく産おきそわる俳生ヨ

蕉わすれたる　家かかしみに金銀おきわすれて宅物のもしつか一る之

箱のまくに　家の家の方ヲもしやしれうとき方ヲ子男をおこす之書屋つはく三句ニ

の附之

亮をおりて　亮の名坐に十女十男のうたれしたるをおきたをおこした日ニまを任ニ老のか一つて

亮ニ人のおくるを燭台もりて

亮とおりて外面をみれば亮の今のまたりつみたる之

今のまた

年寄ます人ニと　年寄ますまれば此亮ニ人ニあきまんをはまき枯もありしをとほあるこ

鬼貫も　前句の意にて主はなくしまうに年貢も滞らずすみたりとほめたる之

堪忍なる　七夕雨ふらねば疫病流行すると云ふ事あり文もつゝがなき人と祝ふべしと之七夕に四日はよからねとも手桟にかわすべし

名月に　十五夜に用ゐんと思ふ草畑なるをこの七夕の夜とせし之　アマリニ早クハタキナハ草ノ出来ヌナセシ

すゝき　鬼もいかストスフ之蔬飾ヲ芋ナカラ名月ノ料ニ草作ルヿヲライヒツヽつらく之

このごろは　乾落ナカラハナモツトユク

山の根　ソノムスラキ気ル折モモサヒシク

よこ雲に　朝ノ勤メノ鉦ナスカニキコエル

畑の上に　織ヲサラス正月二月ノ仕ヿヲテ田と畑を一面ニ雪ナルヲサラシ場トスルニ春ノ朝ノケシキニ

花見まと　盛花ナクヲ瑞生花見ノ次ニトナス之

朱のくさるしは　春の野にきま之

以上三十六句

高知堂製

○百韻

暮の月　中せすらんとて門口に出たれ出はなれたりとわめく之

掃き掃より　わるくさきげとうちに伏し文箒にて掃けんとするに

ちゝめき　瓢箪には下り、前句を雨と見なす之雨かこひありてはあかしをともしたる之　比雨ふりても後ゝ出こ在住ノ大さわ之

坊主ん　前句坊主なる之

梅坂や　風俗文選南行紀にまうた矢川ハ男女有之坊主にあればうら道よりさすらふた矢川まかまふ之

次手　関は関のアヤマリ之

十二三升　大升中升小升ナド関ヲ通ルサマ之

本堂はしる　法会スミテ弁士衣裳ソロヒテ走ル

日のあたる　本堂ノ傍ニ寺院ノサマノ景色之

高畑に　日のあたるあかるい竹は青くして高畑にすみたる水の清き水あたたかなぐ

近江路の　風流文選に湖水賦を国中上に反けふく水に浸すと有るに芳香の水を近江路と又近江国近江のうらと云方言を支多あり　と云ふ或は私に云ふ風流文選

御都者の近江にもうらの詞あり

天気人　家々旅人晴天ゆゑ流人の通情

生なり　天気ゆゑ海上もおだやかなると流人の投さまに芳香をみてこひしこ流人は私情さま

国会に詩

榜の実　流人の住居の駄に極実は要渋多し　サレバ風振クサル之

帯麦　今ハナレ七十番の職人歌合ニハアリ其帯麦ツレタチテ流人ノ家榜ハ其ノ行

御影供　三月廿日の法大師の御影供之帯麦の花の面白ニ人ニウカレ屋ヲ掌ノウレヌヨシヲ云

ほのぼのと　久天イホヒテ花ウル人アリタフノナニカメキラ云

ほろぼろ　腰ウ足ヒムトオモフニ久ノイホヒイタムニヨリ足付カヌル之七十番職人歌合ニウトクノミ
春長ノ都ノホトニミソホトトマクナハヤケレトウムヒ〳〵ミソニウ人　九ヒ〳〵カ

春云　精進法師　神の社の神あれば二ツ　参宮の時　社もせまかるセ神なきにむしまれは　多のせまき神を多りまりしまに参せて拝しましたふ之

なし神を　青蓋云ほろ〳〵あはれ朝夕の菜の物を者人なあに調じおく貧家のすがた之なし神を振てみすは浪人の妻がむかしとしのぶ物おもひのすがた之云（り　○ナイ神トイフコハ未考

まが珈の　ナイ神ヲ振ウラ人スル物カモヒこヒヒ常モチニカズ　祝渡三月四会ニ嫁軍の事アリ
繰ヲ篤ニ結フヲナリ

段々に　結岡ガノ下女ドノ伴ニ見ナス之

尚きあふ　持ハコフ男ドモ懸之

切蛭の　切畑トテ生キ出ル中ニフキテ煙草ノ根ヲ食キルフマミアリトウ六月比ノ畑ノケレキ之芳ノ
大軍ヲカクカフ之

くはり納豆　用ニタヽ又畑ノ畑ヲ焼ノサマニ見ナシ其畑ノ上ニモヒヒケテ仕込之

雁日を　此仕込ヒヒ手伝する傍の中におうをぢむの有

麦でけ　病中故に

つれあれの　麦てすげたつ下駄といふより多賀嘉と見込之

ずいきの　コフライトハ大キナフニ芋ノ茎ノ大ナラ持クニ核ニ頁クん拵ニサル

ひつそりと　四金寺のサマニ家々ヲ見ナスニ

戸てからくみし　ここも四金寺ニカラハカラケノカラニ

伐採す　松ノケシキニ山中ニ仮ニ小屋シツラヒ水風呂ノ所モアニテカラケタル

帰途　比丘尼　途マデ荷物ハコブ途中ニ行逢タル二百姓年中四本ニ乗掛道名所記ト云アリ

コノ中ニ比丘尼ノ守勢延野ナトニウタウタヒテ参ルト之青葉云延野ニ年貢セン

トテ行途中寄ウタヒツヽ勧進スルヲ云ナラン

新ツキノ　ヨノカハルサニ比丘尼ニ行逢

天満　四カヒニ出タル序ニトオモヒシヲワスル

唐神を　船頭貴殿ニ出タル序ニ天満ヘトオモヒタルヲワスレタル

むく起に　船頭カニ青葉云備後国沈隈郡九山ノ出サキ又芳州安芸郡名古ノ浦ニモ

観音アリ海辺ノサマニ

ゆしさ　むく起ニ参詣ノ出カケ竜ノ谷ニテ

十四五両の　ゆしさる新を修まるけを故倹約ユキトヾキテ

月花に　昔ハ北某ノ城ヨリ今ハ貧地ヨリ其形ハカリ残リ度ウカキテ城ニ人家モマハラナシ花ハ

住人ヲ那ノ金ノフリマスニモ出来ルヨシニ自ラホフリ云ナリト　青葉イ(リ)

弦井おろし　其カキアケ城ノアタリハ住人マレニテ海雲トムモノヽシムカ弦井山ヨリノ吹オロシニソレモ

トヒス徒ニ橋ノミアル之此山ハ母城ノヨシ名所ノ書ニアルス

橋嫌よく　海雲ハトレネト家ノカヒニ出来カルヲウレシトオモフ

小壺の　鶯ノ比春日遅ク

黄手も　ソノ傍ニ枕ニ小道具ヒカリ

物角に　変ラマニ清来ノ岳形政トモレラス法都ニタリ

奴三寺の　ソノ高ク峠アリ世ノアルスヒトヒニ寺行テ古着ヲウヒヌンニ又高ノスヽメニタリ

奴三寺ニ参詣スルニ其ホトリ小念山ノ上ニハ夢院トカフ四宝寺ノ寺アリ華蓋寺ト云

けふはけんかく　密蔵ニイフモニカハリ雲泥ニサヒレトニ

藤壺の　おいく降つもりてけふ之

一つくなり　雲ふれは雨のまんとて雲に雨出れば魚ノワタニ菊ワタ雲ワタト云アリ
形色ニテワカル

銭ざしに　魚ノ雲ワタ黄色人ノ舞ヲ云　魚市ノサマ

なあちくき　銭サシ作テンヒトテ塩アハヒノ花ヒキチキルニナメスヽキノ八ル茅ニセヨトテコヒシ取ルナリ
榎木ヨリ生スルニ大小黄生ス和漢三才図絵ニアリ

目をぬいて　四ツ鳴とうんとする人の塩のあはひをぬなあちくきを用ニ

又たゑして　魚鳴する反を庭田舎と見なしてニ

かきすに　魚庭田舎律義のすがたニ

入者る　味噌をたゝに巳ノ日ノ夕しとまいりされば

すがひに　魚の味噌主を出す魚の家の姫の衣裳ニ

庭田屋の　家の取つきの茶屋の娘かニ

ほやくと　旅宿ヨリ者をあて出立て不ハ次の宿の茶屋みやゑ且旅中一の
飾たくんなのけりも雲をうきて不行都のけしきニ

水菜ト　市者九條の辺ノそ多ニ不をうゝ江戸ニテ京菜ト云ほぬくくとうんとほこうす正月
毎日の朝のさま祝日の者ニト青菜イリ

ゑのうち　京都ニハ大家ノ主人ノ者ニ樫原山城国葛野郡ニ出貴ノ者ニカルけりクハスルニ

尻軽に　引掛テ割花ニ居仕女ヲカニ

おりめ　両所出サレニ又ノ者ニ此手紙モテ行テト云ニ奴僕尻軽ニ

入舟　二両おしキ父ニタ者ヨリ降出ス

拭き　東屋ツキナカラ下女ノ入舟多クテイノカ助ツブヤウ廻船問屋ノサマニ

尚云つの　東屋ツキナカラ傍輩上

足なし葉蟹　夫ノ病気ニテ投ゑ

星離小咲孔引　扇引ニ

やはらかゝの　咲孔ハ結すして縫キ孔婦ノ為グル

気まかる　ソ姉ニ魚ソノ名勝ラスヽ心しへ精進ニトヽ云テ姉カ気ニカクル

うんじ軍たる　気ニカヽルノ人上ニ八事ニテ磨剛ニキヨシ

丁寧に　丁寧ハ仙台侯ノ口ヲトキナカラ晴ヤウヌ丁ウメキ云ヒ口ヲトウハ座宿中ノ飯米ニスルヒ

詐欺か　水夜ノ釣錘ニ仙台侯ハ人名サマニ見ヱテ此ハ詐欺ヱニテ密水ヲ防ク堤ヲ築ク上

夕月に　左斎ニテ近ツキニナリタヒヒ夕月ノ面白サニ詐欺ヱヒヌ丁ハ云ナカラ座中アリヒ

色みて居る　堀新ノ序ニテ近ツキニナリタ髪白ノ名ハウヒタド焼ハハヌレストヲ袖ヲ出ス

減もせぬ　ヒ月か前に見たし岳のいまたうれずして

彼岸迄　花のさかりもなれは花おかゝ如しヒ

三人なり　狐宮　利牛　野坂の三人ヒヲ百歌満備し居ハヒ　以上百歌

○

春之部　発句

下文夏部秋部冬部アリテミナ附ケニアラズ

蓬莱に　岡台にむかひて伊勢たより　ゆまほしきは神代なりけり　如に伊勢の神使をまつヒ

ちちのくの　作者杉風は江戸日本橋の住て色白ヒ奥州ヘツをおくり　鈴梅花のもと

春やいけふ　平家物語にあたかにちヒ一は草のふかきにふきんとて橋ヒのしかい田仮（こえさむく）

まりに一は言の葉ちりに食ん田仮の腐ヒ橋ヒ（鶯ハ）此内田仮（腐かるとつふヒ）

いそがしき　書ハ奴僕ノヒ務草又梅園日記ハ下ニ三ヒ有カキ待ハ梅色ノ八月ヒ

梅一木　後ハ草ニヒ本ハおのつからふこを手ケれ　かの枝をきけ条をきりて作り木ヒ

まれ主の心ったなし　梅ハ諸木ニかけりておのつから高ヒ云ヒ

紅梅は　原氏紅梅の差とおもひて

大原や　筑云堂の枝まゝ別有ヤ　作者云マヽタリト云　サハ秀逸ヒトラ此句ニ合ヒリ

うくひす　我モトウト鳥ニテ実気ノ元ハ

これりそ　上品ノ梅ノ名二木縁トカリ　木ニリ練塾スルノ義ニ

めづらしや　杉風ハ魚問屋とバかんぢアリ

卯の花にたちまくありくや　利則集　カワラカケ

懸字紙　字紙ハ懸ヲ愛シ香ヲタキヒルニ字紙云フ懸ヲ愛スルハ[illegible]香気ノ事ニアル
ヲコノカトニサハ蓮ノタグヒニ

うくひすの竹の　芋庵集今さらに行おもひけん雪の竹の末に枝の匂ひ[illegible]

ほとゝぎす二つの橋の　山城の国注琴により北遠集　忠見　いつかたへなきてゆくゝ之ほとゝぎす
よそのわたりのまだ夜ふかきに　注ノエトリニテ夜ノカヒハ一ニノ橋ニテ[illegible]ノ[illegible]ト

ナルヘケレハ　無名抄　ホトトギスニ[illegible]

行燈を　百芳ハほとゝぎすよ鳴わたれとし丈を月夜になをしてみん

柳寺に　美濃の国安八郡立政寺俗に柳寺ト云神君廟ヲ京伏浄ノキ此寺ニテ柳葉
見ヲ[illegible]ハ中大臣ヲ手ニ入シト祝シタマフトカヤ

五月雨の年に　畳集ニ後ヲ

文もなく　芋白集ノ故事

ことのやい　こハ端午のカサリ人形ヲヨセルニセハ當季ノ詞ナシ

五月雨や流の葉　青蓮云のハをノアヤマリ

川中の　ヨロフトハ校転ノ大鏡ニ[illegible]エタリ

三日月の　陰ハ影ノアヤマリ　孝云小本ニ陰トアリ元禄ノ本ニハ陰トアリ

は（山　蓮本ノ人山ヲ云

竹のすや　源氏横笛

七夕やうりかけたる　よ[illegible]のほゝは北南に明け放事ハ北（よこたはる。

閑居　風俗文選ニ[illegible]後ヲ新延年五右詠劉伶ノ善ハ文選ニ[illegible]エタリ

てしかなと　後拾遺、梅の香をそくの花にほはせて[illegible]ノ枝にさかてしかふトアリ新古ハ[illegible]
柳ニカケマホしキ

近に鳴や　ホトトギスト同ト大鏡ニ[illegible]つまぶく風に[illegible]

12

箕に干て　綿ノ実ハ桃実のごとしねに綿の形ヨリ云　四こなりテ綿ヲフキ出スコトヲ桃吹トモトテ吹

こがね一両不て　青蓋云後者未見又

茸狩や　多茸　黄茸ハ和漢三才図会ニ羊肝菌　今云鬼口茸トアリ毒アルヨシイフ

くる秋ハ　古今　秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

冬部

冬枯の　大和本草　鶏冠菜（ケカノリ）　和名抄ニ水苔

芋喰の　信濃芋に真成院の定親僧都勅多芋はツ食ヒ　つくし腹ハ今しなにこと也ニ

小春し　しめやかなる冬はたゝ怪民夕歌　ふみとろのすかうすの音も

飯道寺　近江国甲賀郡水口ノ辺ヨリ一里ハカリ南ニアリ延喜式ニ飯道神社アリ杉ハ葉ニ　ムラ〳〵ト雪ツミ見雪　立日ハ晩方白鳩ノヤトルヤウニ云ル

朱のくるわ　新古今　明るあて神打ムラカケそさし佐野ノワタリノ雪ノタ暮

白うゝ　打ツカヒハ春ノ初ノ其ハシリヲ責既ルカ故ハ冬ノ部ニ入

山陰の　青蓋云河内ニ師走ニカル出立スルニカ

なしよをて　コヽロカラナスマセルヲ云　今歳暮イトナミナシハラハ寄剣ノ当一所ノセハシ

としの夜ハ　青蓋云トシの秋のいそがしさに依かたつゝ言けしらるし　扨ハ年もいたし　なりひの外の陰つゝおやすさまこ年の歌ニトアル（ヒ）ハ（ハ）ニノ誤

部階　秋之部

以下歌仙之

秋の空　白氏　秋天高ク秋光清　尾上ノ杉ノ高キニ秋ノ空ハ（ハ）ヒトシテ（ヒ）ハ（ハ）ニ

朝霧に　鄭谷　日傭あつめんと合田ノ貝ヲ析ニ海口見腐ノ多ヒテ

月のかくし　つゝみ　雲裏ドノ迷ニ月ト見ナス

祖父ら　医氏主婦花　鋏ノアカリ呼出クレハ祖父ノイミシキリ古来云ヒ蒙白ハ
手人ニテラス主婦ノ奇トセラス
つたへ道にハ主婦ヨリ保氏ノ口ヨリ道ノサマニ
下京ハ　蒙白ヲ下京トスレ雨ヤミシタルニヨリ妻船一時ニ艘トキテ
坊主の　船ナトモコレヲカシアル
足軽の　こも坊主ノ花きんラクロガナリ
息吹か(す　フノ口辺ハニ組ナノ足軽カ守シタルニヨレニ
田の呻　気息タエタリト告クレバ
道者の　アニカナ節ハ和漢ラウタフ　大徳田ノ時ニ早稲ナヒオキテコレヲ聞ニヨリ
行燈　銭ヤリテ其アヒナナ節ヤカントテ
歌に杓子　初カントスルニ主人ハウタヽネシテ銭ヲヒロハ叔ニ行燈ノリタレヲサガス

鈴縄に　鈴ヒ仕方ヒ奥ノ縄ニ人ヲ待アヒタメニウタヽネシタルサマニ蒙白ヲヒナス
一人の下り　其川ノ寡名ヒ
四夏立の　大井川行幸記ニ梅津ヨリ桂ヲヨヒヒトトリ蒙白ヲ桂川トヒナスニ梅津モ桂モ山城国
葛野郡ニ
むかしの　夏花もみちもいかくとくにおとつる
いさころ　お木不絶河にて生ヒにつまるヒたるむかいしのはせをたるナノヒ
宮のちみ　青苔云ヒ附言ヒ木ハ地性あしく下京ノモノトヒヒタリ蒙白生ヒこのもの宮のちみ
夏草の　夏古き宮のちみ看て春庭し田舎わたひ式しのかぶとにさ小ちる
あばたと　田舎ヒ来し今まわりの小侍ヒとさ小たるが人ヒかノ花ハ木ヒあばたといはるヒ
をいやかる
年の夏　こ小らのもつて俗ちりて有ヒ比ハ侍か仕業ヒしかるヒに伐ハはあとハはるヒ
いやかる
節ヒき那ち　言ハ宮柱つちねの落ちて移陸ヒかぬ風ヒ場に雪ヒさかぬ水風ヒを
まちヒ

君ぞ知る　田民とたえむたり主稱死の家孤たもくしとうあく蓮生に寄りはてぬすがたの之

稗と隆多　高家孤かりあれゆくわびしさに下方子どの食稗をかひてくるさまの之

辛崎へ　高下男隆と稗とを芋ひつく辛崎のあたり老やゆくに手をるにちぬ条とまるさまの之

小すり　辛崎より北に以良の宮祝あり そこより風がさ書けしき之

紙燭して　風さむく月もまさくわびしきに酒の肴もとめしを見る之 ○弱い紙のアヤマリ ミアエズヤ

上洛の形し　高家しき人の家門のさまの

小栗より　小栗形に照天の朝の道経情より今浪布丈 家の主人 庄言に上る

けいと　日和あしくけいと服書ねば庄言ませ小栗より之 舟の纜ようウケルト云 書セヌ ウケマ〈ト云之

今四句　以上三十四アリノ今四句之 通計三十四句トル

○

天野氏紀行

桃郡ノ氏　コレモ三十四句

道くたり　道スガラニ竹ヲ葬ヨ竹ヲ葬ヨト 拾ヒアツメタル

どんどと　稲刈テ後ニ菜花ヲウエレトテ田ノ水ライトテ 今ハ田ノキ 笠山ヲ サ ケ秋ノケしき之 所ニヨリ

八日に　秋ノアタタニ水ノ落之 秋ノケしき

塀の外まで　板屋ノサマニ黄ナ臭ナ朝ニ出ニシバ相ノ大木ニ月ハカラシ 在ハアワラ矢ん芝之

朝ぼらけ　茅ヶ朝起出ル 又ヨリカ附ル之

つよう　他処ヨリカ(リ)道 麦ハ ニアト 泥ニ足ヨコモバ之

瓜の花　瓜ノ手ハ下ヲ見ニ向フリ出ヲ ハヒカリニカ 今又 ハ 花ニテ花ニテ バ 咲タトニヨリ又ハ ホドカ手ニカハ之

近くに居れど　大ハ 蕊ノイトマ ナ 故ニ 居ル 寺ハ大和国之

年よりた　孔雀ハ ワカ ヨリ ヒ 近ヲ 居 ヘ 年ヲ 又 年ヲ ヨリ ん モ マ ライトヒ ヨリ ツカ ニ ハ ス ヨト云之

いつまで　ツノ年リカキラヌサカカル

甚於け在　揉陰スルニテリイツ迄ト書シト之

今に来るし　今斎大臣ノ飛鳥路ヲニコサズニ台所揉陰スナリ

ほんなりと　ホントリトユフコト　大様　今ニナリ先様ノ御待ちる之

鐘撞むかし　茶句ワヲ主人ノ留守ノホドニ妻ノ楽物ナドニスルニ鐘撞ノ工カラテ主人ノ云フト　サリカラシト云

時ならず　鐘撞はありもしる夕月秋盤の内とて時ならず念仏の声きこゆ

鴫立沢の　から田中に庵むすびて浮世をすてたる示又時なる念仏の声きこゆ

人の秋　鳴あらふ田舎にはあと人よりおもひめてなげば

より年の　よりハ気のよりあつめのつきをとふか又損かる心か年は精好年、仙台年ノ川越年　茶の年にて知名なるまで居風あれは機木やけておやすしそぞさればさみやはなくて

時あらば一は大柳を用と云茶句花をうれ珠も年もすぎたれは　機ヲ直がへる之

むかひの中言　機な雨かくりたるおしもむかひ締め小言きこ為すとるがじしく見えまはおとと之

宮込花　中言ふある人性急於見のむくむなれ　来を流して操を去る之

帰りけき　未お陽多く秋ふれは　うちに秋の子を附るる之

花の葉は　春、蕪の未し炊より炊ひてやうらうあ茶の葉はお庄して心よくありあた茎は　かふ秋の主をあり摘るさるも久しくわつらひたるゝと秋の魔見あがり魂ふ之

杉の木まに　茶句の病人や、おこなりて杉の木まるかくふく月を御もしおくらやる

おもしこと　杉の木まに目けかれふくと老人のもなし分かてしくふをきくた時刻　うつる之

たまえて　姑まるおるよゐこさといろしかたくいふ事にたこれはたあけしと和ひて待ると之

よ怖うに　薪部屋ニキラク手前勝手に

しやうし絞は　剣ト六豆ト麦トフスマヲ以テ製スルヲ釜ニ入レテ其垂ヲ貯オキテ用ルニ醤油ニマサル、シヤウユンハ正真之純粋ノコトナリ　コレヲウリテハリ気スヨシ之　イカニセン水ヲマセンカ

サテハ評判アシカラシ心決シカネテ和平ニ占ヲ立之

1.0 高知堂製

悔みも　かんアミサミも両帆ヌキテ田舎人ノ正真ノ垂ヲ商フト之

京物別　京ニテハ肌ヌクツセトカタシ京ハ多人ヲアルハ海風モタヲヲロシカラテ田舎ノヤウシ家ノ方ヲモシト之

燒物に　多田数ハ今ノ伊勢数之ト云説アリ勢州桑名ト四日市ト向ニアリ又振州高ト郡ニアリトモ云奇ニ名人ト云ヲ新宅ト云モ宝寿ノ題号ノサマ之

隙を塗て　新宅ヒラキノ面近ニモ隙居ハ之

髮金は　家ヲ隙居ノ隙ヲトル事ヲ髮ヲ蓄ス

先沖まは　船ノ髮ニ金物トカモ上ト此沖抑度ヲ入舟アハシヲ入モフ

内てゝ　船向ヲサヒニキ又ニ磯山ノ花見ハ形ニモ入舟ヲ見ツケテ悔フ之

ちつも　風フカヌ長雨ハ又ニ花隆ニ茶ハシシトアリブ之

以上三十三句

○

振賣の　丈満ヲ庇（コレカヒタマ（ト云庇ヲシシウシカネヲハ生ニコマハ又ニアシニ明廉ノ庇五寸オ以上十五歳以下ノ孤独ノ者ヲ宜シアシニテ振賣ノれヲハシタ人ノアリトヲコノ机ヲシハ仕ノ中ヲリ多ヘヲ雪セラルト

降ては　十月ヒロシノ比シハ時雨フリヤミテハ又ラルンヲコ先見商人寒オテ来ル野下ニタ、ダウサマ之

番近か　時雨ノ雨ライトヒラハクシハントスルニ桜蕾ヲ刺カネテ、

片はげ山　番近ノ程ノ刺カネヲ庭ノ中ニ月ノ出タル之

ほのの　餅ヲ搗オキテ月ヲミナガラコレヲ食フ之

剥木の　寒ニ対シテ易キ剥木ハ心カキヲアタシトテ、オシ炬餅ヲヤキカラ寒ニクハル

網の音　安キ剥木ヲ泡国ニウシトテ後ヲ船通行ハ二番中ニ網張オキタルニサハンハルモフ夜ニ舟ニ近ツキ声カケテ魚ヲ網ハ之

星さへ　二十日月ノ頃ハ酒上五ニ心ノカヒスル奥ヘトヲ網ハ之

ひたつきハ　二十八日月ノ頃ハ出陣トシナンテ

浩気の重に　寒り出しなくもなくおぼえて雑談も世界中に時刻うつりて二三腰となる

明しぬ　暁空より出なれは鳴鶏がなくも雑談も無かりせず あかきりして今は秋もしらみ
挑灯を消す旅客早がる見ゆるに

肩癖に　寒気ものゝ沖之

上おき　干葉ヲ鍛ノカラニスルコマカニ刻ミ鍛ニアカスルヲ上オキト云 干葉キザミテ肩ニ乞ヘ
湯風ノ薬葉ヲ浴トニナスニ

馬に出ぬ　内仕事ニ干葉ヲキザミナカラ オモフ女ト打カタラフ

絹買の七つ立り　青蓋云 むハさの漢之 絹には糸ヲ篗ニカケテ腕ヲ見ヲ云之 馬ニ出又日ハ内ヲ云
レテクノ山時ニ 絹買ノ絹カハント云ニナレトモイヒカタリ折フセシト之

塒に閉ある　絹買ノ音ニ見ゆるハ之

此島の　五十花ヨトヘラ島名主ト見ゆる

砕に暖の　祐生比アタヽカナルハ筵モナシニ青草ノ上ニ居テ花ト月トヲ賞スルニ

新畠人　窓の上に芽土ヲオクトキハ空モハヤクキユトゾ。

吹とふたつ　新畠の薹もおちつきたる窓の上を滑りかくきまゝ之

川越　水かさまさりたるをあふぎありて川越のくるを待ときしも川風空来て笠を吹たれは
まりかく旅人の様之

平地の　憐れなる人の水かさのましたるをあふぎありして傍にある平地の寺更ヨ出水の用心
もふくうまきゝ藪垣のみなるをみてあやふむ之

干物を　なる寺の内を見込だるにかくれば貧寺のすがた之

塩出す　干物を日向のかたにいそがせ塩出す貯ふと 空念の背たの佇たらく之

算用に　京都ハ節季候素ヲて雑賀れけれは隙せをわたり算用立て來よすものの路の
塩を出す之

又さたなしに　京都の方言ニ女の産するを産ニひと云 多産ヲて雑費も多けれはわれにかくして
腹がふとうなると之

どたくた　大晦日の煩いそがしきありしの腹が産之 此ヲ見て赦のやかましかりし之

名筆の　ある大晦日ト云ヲ 金カロト云 書状ノ札ヲ借リ名筆ノ見之 二句
のそくノ誤か

中よくて　ある句ノ其手簡 我ニミセヨトヨメヌル云ヲ 借サシト争フ傍輩ートモ戯ニアラソフ之
○イラヒハ争ノ事ナルベシ

陸もとたき、

風やみて

鯉のなるこ

ちらはらと

目黒まゐり

どこしかも

鞠炭の

〇

三三巻

竹の皮

那須カラシカサシノアラソヒラ中ヨキ友ノ四月ノオモシロキヲ愛数セス宿ヲネセントシテ陸タヤ物カリントテ立ヲカサシトスルナリケリ

クヽン雲色モ不見ニテ夜ヲネアカサレト陸タヤ

鯉ノイケオタニ融川獺ナトニ取レシコトヲ語シ鳴子ツケ財キテオドスニ サラ鳴子ヲ引トキハ鶏ノオトニキヲ立ントオモヘバ之

新玉人ノ行戻ニ鯉ノナル子ノ綱ラヒカヘラオト立又ニ オト立シハ西立ノ取之

目黒ハ武州芝名郡目黒村瀧泉寺ニネテヤトハ恒三居トカフ之草以名ト連ラカメ〳〵カ〳〵ル

青ハサビシキニ花コソハ目黒モニヤカシ

那須ノ七キニ

四月三十日

三月一律ノ附ニ延年ト箱コヒラヘヲト此ニ三巻ヲ与ヲ云

脱洗ヲ又ハ竹ノ皮ヲ鉤ノ背ニセヲ送ニシレスンニ移ヲシ名ヲカ此件ノ広ニサハン問ハ法

稲に子の

手弱の者

めつたに

よひ〳〵の

茶をしろ

背中へ

川がすに

背ヒ人

物思

西条の

稲株ノサス雨ノフリ出ヌラウヒトイモフ之

青葉云幸人ノ魚猟ヲヲ人ヲ猟帥ヨカニテ手弱者トカナフ其雨ハウレシヒモ空タヽスマヒモ常ナラネハアレキ風ヤフカヒト手弱者ハ一人モ不出之

手弱者ノ三文ハ此比ノ風ハヤル故ニワスラヒテアラントニ猟帥トモカ之

如何ラハセテ出テラン大エカ流行風ヲモシワスラフトモ肩為人アルマシト心細クオモフ

茶ヒシロハ其延ノ土ニテ製スル之 キハクトハ茶洗ニシテ之ニ花散テ毒蕃ナル之ニテ茶ヲ製ル之人ノ背ニ子供ノ未ダラカヘラオモフトニ

背中ハ如何ナル土ノ背ヘ〳〵其高ノ見カ之コレヲカヒヲオボエテ故ヘ〳〵少シワスル

茶園花モアリテ面白ニ又

巻示ニ出リタルニ朝晴ヲ見ハ猟出ヤラテアリニ背ヒヲ出テ山ニ行テヒロアリ五ドニイシカ晴天ニテリテ物ヲモナヤラ心〳〵ト気分モ好シ

背ヒ人ヲ山ニ行迄ヒリコリ思テ男ノモトニ立カレトオモフト身自西ヲ立ヲ〳〵

男ヲ夫ニ死シテ歌ヲ立リ夫ノ亦ノ忘日ヲ待セテハ高日多クナリ来ヨ之

餅米を　近年の餅ニトテカハルコトシナカラ茅ヶ崎ニテ

わさく　病人回復ノイハヒニ餅ツカセトテ使ナト一ハカリコシテ入れ此上ハ祝ヒ

雲母て　少醫師林野將来テ自ラ登城ヶ月ヲ自慢スル

とかく行　主君目前自慢ニ煙草ノ丈モキエレニ

又けさも　清家ニ大ウセニ行ヲ貧僧トシテ

接ばかり　接ノミニテ紙松ノ舟ニテ清家ニテ大ウ酒ノ飯ヲモラ

大阪の　人ノ人ノスルトキ老ノ月ヲ人ノ物コトニスルトナル物ナカラ接ハカリスルトニ

酒とと来ル　人ニスレテヨカラヌ多キ人ニ見ハ祖母ヨリコヲ

すけぬる　持参ノ俗肥ヲカノ酒ヲ人ハ今ニ出来ルト祖母ヨリコヲ

次の上部屋　其次ノ間ニ祖母カ座テ慢ニ白ムスルニ

約束に　蓮ノコニ待ツヨトニテ人ノ家ニ入ニマラドモ

怪ニムセテアル　出コネバヤラウカトシバ其者ノ小部屋ニ

七ツの鐘　ツヤンマデコニ待ヨト加茂ノミヲ待セイ多ニ数ヘンナドシテ用リヘンヲ今ハハヤセフトカニ

半ニ来レヨシ之

花の雨　老ノカヘリヲ待ツ電車ヲ五ニ雨フリフラストアラソフトニ降出シ其時明セフニ其時ニ半

ニ来レヨシ之

男も乳ノ　蓮ヲ乳ノ母の役セトモ雨モフリ出タレハ男モ家ノ子ニ使ヘンサマ之

以上三十ノ内

曠野のお聽

10 高知堂製

巻一 花 三十句　社字 三十句　月 三十句
二 歳旦 四十五句　初春 六句　仲春 三十七句　暮春 三十九句
三 初夏 三十四句　仲夏 四十句　暮夏 三十六句
四 初秋 三十七句　仲秋 三十二句　暮秋 十一句
五 初冬 三十七句　仲冬 三十六句　歳暮 八句
六 雜 六十句　詩題 十六句　殺生 五句
但雜六十句中有此十五句及此五句
七 名所 二十九句　旅 三十句　述懷 二十三句　無常 十七句
八 釋教 四十九句　神祇 二十六句

七一冊ノ友人青藍ノ注解ヲ筒録シタルモノ
丙寅 四月九日 閑筆　池爾保孝

曠野

尾陽蓬左檀木堂荷兮子　尾州愛智郡熱田ノ神祠ヲ蓬莱宮ト云コノ宮ノ左ニアタリテ荷兮ノ家アリタルナラント　支人青藍イハク

をり〳〵の書捨　句

實をそこふふ　青藍云貞風武檀林の俳諧をさしていふ　孝云　芭蕉ハ武檀林風ヲ見アラリタルヿ歴代滑稽傳ニアリ

いと中ふの　朗詠下晴　えゝこけれ　みどりのそらものどけくてあるかあきかにあるふいとあふ　○孝云　翁ノ謙辞ヨテ荷兮ヲわが芭蕉の心をたとりて　のたうるゝは　翁の心をさす

ひゑゆりの　山家集下　ひけうたつあら野ヨ和ふる姫ゆりのなさてつともなき心かふ

みねの雲きえしハ花ヨ　孝ナラハ　もゝヲ　ゆ　ゆ　花の哥ヿてゝく有て花か咲ニありて　いかゝ定家色まかふまことの雲やましらんこゝ江楊の四方の山

ふこの下の客といはれん花の宿　青藍云　山崎宗鑑の庵の額ニ　上の客立夏り　中の客ヲの日かり　下の客泊りのけ　かけり人のくるをうるさくおもふ故ニ立夏りを上とす

たつ花ニ誰かからあさていまくし　花ニ雨はいとふと今はつ花ニ雨具の用意花ノ為ニ不吉ニトニ

紫舟ニ花咲ケリよひのあめ　花の枝のましりたるに夜の雨ニ花咲たりと朝をたるゝ

又一説茶筅ト呈ストモヒカハシテハケ公然ト連立花見エカハ人ケモハクイカナレバマクルシト

杜宇三十句

をるときにたりて逃けり花の枝　引ヨセテ折ントスルニ花ノ主出タレハ花盜人ノウレナレハ逃ニ　巻二初春　梅折てあちり乙ヨなす野中哉

連たつや從茅はをし花の時　青藍云　ヨカシハ俗ニマカワルイト云フ　孝ハ從茅ナレハ夫婦トモナルベキモナレハ中ニ押連立テ花見スルモ風流ニをかしト云マクルキハアルマシキ

たちたひやたつ花すの物わすれ　花咲をわすりぐうかれて家業もわするふり

檀の木のえふコうヨえ立ぬかた哉　野ガラシニコノ句アリサレハ瞻野ノ編者檀木童高今ニ對シテ

ほとときにすヨ日えやき夜舟哉　都すりハ十日ニ數えやく寸鳥きてと　夜舟ト云フ　拾遺集夏　主生忠見　いつかまきてやくらん郭公ことのわたりのまた夜ふかき

佐賀君云前齋宮伊勢ヨリ帰京ノ時御供ニ候ヨドノウタリニ御船付テ人ニ交履アカスアヒタムカヒノ市ニ郭公一聲ナキ行　万人断腸自所船ハ女房戸ニ竊ニヨドウタリノマタヨフカキニ詠メシ臨時メテタカリシ者也

あふふしや今起てきく郭公　拾遺夏　さよふけてねさりさ左寸鳥人ってこそききてへりけれ

くらすや力かましきほとときす　大木夏　五月やミとらヨの山のほとときす　五月つかふしやとの一声　式部ニは郭公のなはつかふしとと人きけとハ力ヨしくおくと

哥ゐるた　青藍云　側ニ哥ゐるた取ニ居ル者ハ人ありあけの月をのれると吟したるを寸鳥ヨつ人ハ　しき敷ニ書き人哉といふ作者智月は乙州の母二百の風情おのつから婦人のすかたよ聞ゆ　といへりかゑ夏一首後僧大寺左大臣　ほとときすあきつるうたをふるむれ仁たこ有明の月ぞのこれる　式哥千載夏ニ入

月三十句

かるくと笹のうへゆく月夜哉　小笹踏ゆくとあるきてきれ月夜のおもしろさにかるくとうかれゆくと　青藍云

月ひとつたひそりかちの今宵哉　奪取ニウラハブク源氏夕雲かけろふ上ニ示ウつほ藤原君

屋わたりの宵はさしや月の影　桃の首途　家わたりの苔ニしたらしき牡丹哉

一つ屋やいのいるまるけふの月　白氏前亭夜詩　坐愁樹葉落中庭明月多

名月やそしに十二は有ふから　續古今雜上八月十五夜　天暦御歌　月とみる月ハれどこの月のこよひの月ニ似月をおきて

名月やつくしの声と犬の声　万葉十一　手もすまのうちなすつみかをふれは吹ハなりぬあはなもあやし

影ふた夜たらぬ程なる月夜哉　十三夜ハ十五夜ニ二夜たらぬとすれとふたよたらぬとハしまた貴説をもしおいぬれハ二夜たらぬといふ　あり丈山の十三夜詩ニ一輪未滿三分餘賞尽中秋又至地トアルト同似テ意ハ大ニカハリ

何ものの見たるも似すこの日の月　王鈞月鉤蛾眉　破環　唐鏡　ナドヽ見タテイトヨモ似サルヨシ

雪三首

雪の日や船頭とのい顔のいろ　自然居士説　何ぐ船頭殿のい顔の色こそ雪ってと

見る人もたしなき月の夕ふふ　巻五冬　木枯ニ二日の月ふちるか

いさゆのん　青蓮云　ふるゆ

こころはく無尽はしさらハうらん夫浜いさゆかんと　雪の夜ニ王徴之が戴逵門前ちりうたる雪をおもひ了ぬる一しる

大みられじ　雪の夜　ありとろ

花ちらばみしろの峯ニの堤とえうしる（けれど　雪はいつしか　おもしろ　ふれば　指量ふしたしとこ）

舟のけていくのふれとも海の雪　ゆりのノむすひいす

二日もぬるりハせしお花の香　赤草紙　二日ハとすき　匂ふれとも　平間ふれは　二日もとせられたり　○笈小文ニ曾の　空の名残をしまんと酒のミ夜ふかして元日寝

わすれたれはトたし書あり　大鏡云　二日ハもぬるりてねわすれるかいや

ぬるりはせふとこ

四ツめや凡千年の鶴　をいひすたり

松うさり伊勢か家　古今長歌　伊勢　四ツやともせるまなゆく

うるみ香　連哥ニあらてもさうし　青蓮云　この蝶　夏のふつくるるたちは年の星知ニあらぬ又　連哥ニ月すされハ俳諧の景物ニ（ハ）

あさり木ニおらて年ふる梅哉　梅柏とならハ（と　梅ハとし経と）

元朝や白とふけれとおそさくら　元朝ハ物しつるさひしきうちニ面白　おそさくらし　青蓮に四方はこゆる中にさしくしやるとと面白おもしろ

遠国ニ梅の花みむ　世捨問者　遠国

ふたつこそ　作者三十八歳ふるし　四十を初老とハ

伊勢浦や御木（ゴキ）ニ休む今朝の春　大神宮の御ミやを造営する木を御木と云　御遷宮有て五年ヨリ七年休　八年目ヨリ　山入トいひ　木を伐出して　たこふ　これを御木引

（とふ　七年の引）　夫より又七年　造営として　御遷宮有　都合十一年）と云

小柑子栗やひろろん　大鏡ニ伊勢物語を　今考るにと云

さ任姫やふゆの面のあらむ　青蓮云　佐保姫ハ名のミて姿ハ　ふゆの面ニ佐保姫あらはいかふる面ニつくるらんと　ハ（ふ）　ふゆハ廿面ニ

大服ハ去年の青葉の匂ひ哉　元日ニたる茶を大服といふ　大福と音ハよ（ハン）　挽茶の匂ひ去年の青葉ニ似たり

くつ春のめてたき名ニ　賢勇と　青蓮云　眞里ノ後　さて塩里勇あらんといり　孝云　ほしあたむ　里勇節トイフト　ハ塩ニハ　ふるしきニ　勝ニ　詞のかまはさるとおもし

義経が勝浦とふ所（毋めつきたるをよ？）　たふこと　平家物語ニ見えなりたしれさ　里勇節ト云（きこふとりとハいひけん　かたうをヨ名呼して　あつをとあるよ）

初夢や濱名の橋のいつの古　濱名橋　極楽百首　ちはこの橋ちらさ（打えて濱名たるをさ　わたる哉トよめれば　古くより絶たれとこやひのおもひ　ねニ濱名の橋の有さ　ハを

公伸春 手をついて哥申上る蛙かな 如ク蛙のさまをとりくしふいは書るなり

初夢にこたれとやけり今日の斬にし移ハおしと云

志つやまつ御階にけふの夢語りし

公事根源 奉賀奏瑞とて二人の者庭にすゝみ出ていはひ申すなり さて当年ハ麦の出来よろしきよしを以て云 但公事根源に麦の事なし
是はかくもあらんとの作者のおもひよせたるにや 又志つやまつといへと民百姓ハ両人いて申すにはあらず 志つやまつ云云 其意ハいにしへ去年の豊年を奏瑞と定めて申出たるを奏するなり

己のとしやむかしの春のおぼつかな

大鏡に名僧たちの誕生の日のことをよく知りて居たる証をのせたるは作者己が年のうれ おらんなりけり 誕生の事さらにおぼえずよく思慮とおもらんの事をおもふさはこと

以ノり

我は春目かどに立るまつもかな

雲水の僧なれば門松立ることなくて春のけしきを目かどに立たつる まつ毛を門松の松といひ下したり 作者僧なれはこ

鷹居て折にもとうし梅かえに

拾遺 雑秋 家つとにあまたの花も折つきてまねたくも鷹を居てけるかな

花もなきうめのすはいぞたのもしき

青藍云 花なき枝といふも来ん春花のさかんならんをおもふ 一八そのもしき すこ比すはいハ梅か又別にあり

梅の木になほやどり木や梅の花

青藍云 この句笈日記に胡来亭といふ端書あり 支考注に呈いその父弘氏のめし比道の風流に名ある故なりとし 白雪云 網代民部ハ即弘氏か

うれ紫やまたかけろふの一二寸

青藍云 山谷詩 街頭雪泥断乾已放遊絲高百尺 考云ここはいまだ春ならぬ故に一二寸といふなり

つまの下からしみねたる継穂哉

青藍云 継穂せんとてあくまたわたは股ひろげて両脚のあはひを衣のつまにかくしみねたるとこ

暁の釣瓶にあかるつばきかな

青藍云 桐陰露井月斜明 李郢暁井詩なり 錦繡段にあり 金井轆轤鳴 暁井 東坡詩なり

入る雨ハ世の望みなきさゝかな

大鏡に望は伊勢人杉田句意 旨人にして俳諧をこのみ句を人にみせてし 竹の筒に入置しとこ

たかふさの尻つまげたる白尾かな

大鏡に説あり 鷹ハ己の尾の白きをみて雪こそおもひ山に入る也としとこ 青藍云 尾の白を己とつまげみるこ

山吹と蝶とまぎれぬあらしかな

黄蝶と山吹とよく似たるも分別しかねたるにあらしに蝶の飛去 まて花と蝶とまぎれ枝にあるさまなりし

友一羽て鳴音あはれや夜の雁

青藍いはく 杜詩 孤雁不飲啄飛鳴声念群といふに似たり

肖柏老人

扶桑隠佚伝

おちつきてはさびしひとつ葉の一つかな

ひとつ葉 石韋とあり 和漢三才図絵九十八石草類にあり 青藍云 泊船集 なつきてもたゞひとつ葉の一葉かな この集にひとつかなと出たるは誤 のよし 支考いへり 大鏡云 一書に枝あるものハ枝にたかれ花あるものハ花にたふる 一つ葉の安きを愛せる隠逸の観想なるべし

いちはつハたとこあるらんあきつてた

青藍云 いちはつハ漢名紫羅傘又鳶尾といふ葉射干に似て花の色紫碧燕子花の類にして花はやくひらく故にかきつばたと共にし

いさりを男に見立て作し　孝玄本草薬名備考和訓抄に蔦尾ッアサ、
半綱ナセヲ引

おもしろうさうしさえる鶏縄ぞ　青藍云　さうしハさうぞ　さうハ左右　しハ知ノ誤

松笠の緑をえたる夏ぞ　えたるハ亂る　青藍いり　金葉　みなして楠青葉ッなりぬれハ
松かのみとりもえるれすけ

虹の根をかくる檉中の檉ぞ　檉の大木さへくれて虹の根ミえぬさ云荘子ニ檉の大木なることあ
檉の大木ふらぬものふハけ句荘子ニすることまてなて実異ハなら
ふらぬとふハ檉の字あらぬとふ拘今のあふぞハ大木ふらぬ
ニやとし大木ニふらぬものふハけ句荘子ニすることまてなて実異ハなら
すれしあふち大木ニふて虹の根れあらすほとふらんぞ　あふちニなてたる文字の
なたり　なたらぬハさたするまてれあし

撫子や蒔絵書人とらるらん　枕冊子　のきてなるの撫子　桜山咲

すひつさへすこきニ夏の炎俵　枕冊子　花さまきの夏のきいつ

夕のほや秋いろ〳〵の獣の子　京ッこ〳〵ある ひろ草ニ書ハミし秋いろ〳〵の花ニ夕ッ
○獣息のやこ　これハ誠ニ　むすいて書あし

すゝしさにこめすもやらぬ木陰ぞ　エチモヤラヌ　ろ得思ニ榎をのけり　夫木九榎　いたなめきての檉の葉をし
けし道ゆく人のやとらぬハあし

蓮こん日ニさあやさいわるらとし　病後の新ニ月代するハわろけれと老いて月代しこ〳〵

葉より葉ニりのふやうふ露の音　詞花　風吹くらの柏葉のそよ〳〵といひあはせつゝいつ
ちるらん

名もしらぬ小草花咲　生薬ぞ　大鏡ニ連歌を密物名もしらぬ小草花さいり辺ぞ宗祇
ホをとりてよめる句ふる故ニ　もし書して宗祇をあ〳〵と
なり　生薬ハ目ニたち物故ニ　ふニ取たていあ

この九ニたに鳥そ〳〵けり秋のくれ　歌のふけゆくきりの裏里といふ素堂の脱ッ
青藍いて

しゝろふくの教ける酒のみん　白氏林間煖酒燒紅葉　平家物語ニ高倉院
の故事より

えすのこ笠のめけつくしたる蓮のこゝ　青藍云素堂ハ谷ふ忍池のほとりにすめり蓮
の実のことし世塵を脱こる人ハなれとてめ中まとり

さそきぬた孤ニやしきニ伏やしき　孫六兼元志津三郎兼氏ハれし刀銘佐の名人ニ志津三郎ハ
正宗の門弟ニて書ニ曜と云ふ濃州武藝云　郎ニ打
ひきぬ〳〵ニ秋のあさ霧をとおるる世ッり替りて今ハ刀打槌の音ニ秋の
夜の哀をとゝしさそと云きぬ〳〵ふハ一人とおもい込こと

きぬ〻おて我ゝ志らせよ坂うつる　この句望さらしまこと文もりむすと淫陽のほりまて樂天をぶみ
しめし商人の（ふこ）これハ吉望ゝ素常の手ゝりて玉ゝ（つほひ）

ハひく故ゝ翁ゝのく少ゝ

いそうしや夢ゝそらの夜這星　和名抄　流星　ゆハ比保之　いそうしと流星多ゝ

のゝらけのまきえゝせゝや菊の花　端書草ゝなりなせとゝ酒のゝて休息せよとゝ氏土器ゝて
のゝ任草ゝ以のなりまゝ

菊のつゆ洞ゝ人や髪帽子　青藍ゝ此句續猿蓑集五元集ゝハ朝臭ゝとりまし

うゝらゝて蔦さへ霜の塩木ゝ　青藍ゝ　塩をたく薪ゝ

一夜来て三井寺うゝへ初しゝ　青藍ゝ三井寺の謡ゝ月ハ山風ゝしゝ水ゝ鳴の海ゝとり初時和ゝこゝ
に来て三井寺の謡曲をきかせよとゝ京ゝ人ゝ遠ゝくきゝ人ゝ

さゝのらゝゝ二日の月のゝきゝちゝか　巻一月二日ゝ人ゝたゝゝ月のゝ多ゝ

としとゝ鳥居の蔦のつほみゝ　新千載集神祇
立ゝらハつゝさゝくゝ山せゝ蔦のゝ鳥の花の下陰

当のおとも志つゝゝ山ゝさゝらゝ　公ゝ和漢

施米　公ゝ松原

わゝ茅ゝゝ七夕草ゝ芋ゝ　七夕の七種ハ五葉ハ五ゝ秋の七くさの事ゝて志らゝ春の七種ハ七ゝ草ゝ
ゝ中ゝ志ゝゝ山のせす　夕ハ夕ゝ七夕ゝ書ゝイカ

撰出　公ゝ松原

詩題十六句

今日　白氏六　府西池
氷ゝし　添ゝ　ゝ必ゝ山ゝゝけてゝゝのちゝゝを添て吾をいゝす鹿おゝし

白片　白氏六　書至
春来　白氏十三　曲江憶元九

花下　白氏十三　酬哥舞大見贈
留春　白氏十一　落花

微風　白氏六
池晩　白氏十五　池答

暑月　白氏十五　新昌閭居招楊郎中兄弟
大抵　白氏十四　暮立

夜出　白氏三十四　雨後秋涼
遅〻　白氏十二　長恨歌

残燈　白氏十　夢与李七庾三十三同訪元九
万物　白氏十五　歳晚旅望

十月　白氏七　早冬
寂寞　白氏六

白頭　白氏三十五　戯礼経老僧

禅閤の撰ひのこし　一隆禅閤ある人し此君撰述の書多し職人哥合のやうなるもの有しかこれ
とうまられす

あさ霧のきほう折けんつもるゝ　玉簪　キホウシ　和州ニテサジキホウ　ツクモカミトハ老安ノ上　糊蔓
カナラス其異ニ水ヲヒタシ潤ヒラトル故ニ朝露ノトイフニ　以上青藍イハク　ノ糊ヲカキトル時　又糊ヲカキトル異形ヒ七ホウノ葉似タレハギホウ折ケント云

槐在何許香煙引到焚處　白氏　李夫人

雲髩半偏新睡覚　白氏十二　長恨歌

小頭鞋履　白氏　上陽人

宮中拾得　綿繡段　范蠡詩

一日留守を
コヽ西ハ十ノ吟
キハ　夜カナレハ
星物ナ故ナラン
ト青藍イハク

玉貌風沙　錦繡段　明妃曲

○牛馬四足云ゝ　荘子外篇　桃子松のつき木する外物ゝいふる穿牛鼻の類ことを

蔵舟於叡云ゝ　荘子大宗師

めらふうら師匠の本ゝうるさゝ之　舟ヲ叡ニ蔵シ山ヲ澤ニ蔵シテ里国トおもふ景ニさゝえハ
叡ある者ハ負れてうるゝことをおもはぬことゝ青藍ハイハク

絶聖棄智　荘子胠篋

鋭者夫　鈍者壽　古文眞宝　古硯銘

茂房　青藍云茂房ハ後醍醐の近臣ゝ帝を陳外に奪ハ人給けぬハ北条氏ハ剃髪し給ふ幸ヲ給ひて父宣房ハたつねさせ給ふ合ノ朝坊ヲ名ヲ乃本をまゝすとゝふ　十年記ヲくは

師直　青藍云師直ハ足利尊氏の長子ゝして好田野智ゝ己ヲさのおさハ滝言ゝて害ヲ大ハ刑ヲ剃ヲたとふ

一休　青藍云一休ハ松ふ松ヲつゝ(て)藤ヲ)ゝ宮の孫ゝまり怪宮をいてゝ民家ヲて皇子ヲうむ一休
是ゝ元ハ元ヲうまれ文明十三年八十八ヲて寂す
長第二年生　建仁二年正月廿五日寂年八十

法然

高知堂製

八重一重さく匂ふところのつゝじかな 大和平群郡

しら息の骨や式部が大江山

むかし定頼朝臣の小式部をあなどりて世の和泉式部のかたに文をたのみてやりたるといひけれハ大江山いく野の道のとをけれハといひて詠ちをなしてより白息ハ骨ある事ともなり

さらに骨ありといへること

あら崎の松は花よりおぼろにて

青藍云 俳諧雑談集元禄四年刊ニ此句ノ論有といへり

藁一把かりて花さる阿波手杜

名花万葉記尾張国阿波手の森ハ下津ト里ノ南ニあり 孝云名寄ニアハデトモ云ハナシ

琵琶橋

青藍云 尾州春日井郡琵琶島ニカケタルヲ云

雪残る鬼嶽さむき添生哉

青藍云信州筑摩郡添嶽山ヲ云 大鏡ニ美濃ニ有といふハ誤之

関こえて爰も藤しろみさかい

青藍云 紀伊名代山ハ和哥山より熊野へゆく順路之 万葉巻七九 藤白のみ坂をこゆと白たへのわが衣手はぬれにけるかも 美濃国藤代山麓を藤代村といふ関あり 八七八里西にあり故ニ関こえてといふ 撰者が按ニ関といふハ此山寺ニもいへハ関こえてとふにあらず白意関といひ藤代といひこ坂といひよく紀の国の名ニ似たること

瀬田橋

近江名ナルニツ 九十六間ト二十七間之 中嶋十五間之

10 高知堂製

牛もふしならぬ羽のなかりの五月雨

都名所図会ニ鳥羽院離宮ノ跡ニ朱雀勤許有しといふと青藍いふ 諸説

いざよひもまださらしなの郡哉

青藍云此句ハ越人をともなひ信州更科郡なる姨捨山の月見にまかられて名月や姨ひとりなく月の友とよまれし翌十六日の吟之 いざよひもまださらしなの郡なるといひてきのふ姨捨の月をしつゝを余情にきかせたる作之

名月や杖にあさふる角田川

青藍いはく白氏ニ御着晩山色府弄秋泉光とあるをとれるハ いふある意ニか 孝云杖ニといふハ

鳴海萱津のなかまのうまき哉

青藍云萱津ハ尾張国海東郡ニあり 全葉 名ニたてるあれてか浦の海士とよもこそ身いふつくしものとさてまけ 続古今 海なるゝ神のひろまゝ行や ともねたての浦のなかまとえらやとすり萱津のほとり むかしハ昔何そての浦といひて海辺なりしかハ今の此地も海辺の事ハいひをしたるか今ハ去して陸となれハよわなりのすへをかけりたる之

冬されのひろり轆轤やとのゝおく

青藍云北山鷹ヶ峰土器村の人土器を造りよし 雍州府志ニ土器ハ北この所ゝにて土器をつくし比叡山西坂下ニ小野といふ所有

よし野山もしくは雪の夕すみ

青藍云よし野山も雪ふりてハそのかすかなく唯士雪のみ多きといふ之

星崎の

尾張鳴海と有月の濱名の間之

夜の日やみな社の小家の煤はらひ

これハよのほとにまじはらひすること

青藍云 美濃みな社郡にあり 板庇のほのもるさまに哥よみ ひるすゝけらひせんハ家葉のさまなりけれ よみハ小家おもひやる[し]といへり

雲雀より上にやすらふ峠かな

青藍云 大和行脚のとき臍の峠にて吟れたるよし多武峯より竜門へ越る道にといへり

大和国平尾村

農家郡なり 青藍いへり

花の陰謡に似たる旅ねかな

青藍云 吉野謡 ひとり山路の花の陰にやすらひし僧の二人 謡なとうたふはよしのゝ花にやとりて下卧や

五月雨や桂目を生きし弟の家

かつらく 五月雨にぬれて木自をいたしたるよし

更級や月は二人にみられけり

妹すてたると男と捨られたる姨と二人に

狩生柿に鹿をたつけよ秋の山

大鏡に狩生柿の事はり 青藍云此柳に紅葉を画けるあり さらに鹿をといへるなりし

澤庵の墓に

品川東海寺は澤庵の建立 正保二年乙酉歳七十三此寺に墓なり

いく落葉それほと袖もほころひす

青藍云 芭蕉翁尾張に来給ひし時は紙子いとすりくの衣きあり 木からしの身は竹斎に似たるかなとの給ひしかこたひまれてそれほと袖

ほころひすとこ

夢にさへし羽織は綿の入けり

翁を夢にみし時は綿おくて寒けなりしか今みてみれは綿の入て有よとことと青藍いへり

天龍でたゝかれたまへ雪の暮

雲の故事をいふ西行物語に遠江天龍のわたりにて武士の乗たる舟に便船したるに人おほくて船くつかへらんとせし時雲にておりよとて

お鄭したることをえたりと青藍いへり

父母のしきりに恋し雉の声

青藍云 父母の遺骨を高野山に納めて有し頃にかてよみけん 李云大鏡に哀前の鶯にかすれしなきいへとこれハ雉子にいへる

されはこそ賢れたきすすめの霜の庭

青藍云 笈日記に蓬杜子の子の死書簡 清貞を杜子かたのしのとあり

木からしの落葉にやふる小ゆひ哉

青藍云 佐古杜子は故ありて李子尾張を追はれたる人にて是は余ハ国を出して落葉にてかきはらふわすれ小指を傷のきるとなり

落葉みく身はつねにあらえやな

和名抄 奴僕 互府称 奴僕の誠でも仏門に入たしとに

さけめし妹の垣ねは荒にけり

堀日吾 蓬莱 むかしもしいすの垣ねハ荒れけりつておすりのすゝれのとしていふ詞を とり青藍云 むかしハつありし妹も今年ちりて飯に大角のかてき用ひ垣ね ハあれてつもおすりのすゝれのみしてと昇の恋さおそらといへり李云さけ めしハ喰物のなからしまさいひさて妹いなき人とよりておみしいりとすゝれの花かを咲と

八百子云 アカノマンマト俗ニ小児ノ云草アリ其草ノミオヒテ妹カ垣根ハアレハテタリトこ

六宮粉黛無顔色

志りふから薄になるつまとお　白氏文集長恨歌の句に

若遺　たくとて宿のつま戸をあけたれハ人もさゝする名のくひふにけり

妻の名のあらハれけしと十一神送り

十月ハ出雲にて神々あつまりて夫婦の縁さため給ふなれハ隠遁を
ふかくて独身にてありたれハ妹か名あらハれ出て縁をくすへるやうなとに

松の中時雨に旅のよめいり

慈鎮のわか恋ハ松をしくれのそめかねて　松葛か原に風さわくに

山畑にものおもはいや燕引

新古今に　なるみおの岩のはさまにしも居て人のおもはてものおもはいや　西行

散花を南無阿弥陀仏とゆふへ哉

仏といふ一字を絵トカケタリ假字たてへり　青蓮云　隨清諸語守武辞世
あさかほやけふハこゆらん我世哉又辞世山わかれしあたしゆくまとをねの

松風　峯の松風　青云　大鏡に引たるとハ異なり

松坂に　勢州に

いもうとの追善に

此妹ハ千子といふ　ころもかへし此翁の美濃よりおこせたる句猿蓑集に入と青蓮いへり

あはれ之灯篭一年に主に斎

青蓮云　に斎ハ其角ノ社中に花摘に三回忌の時其角のよめる句なり

似た顔のあらハ出きん一をとり

門外に顔ノ似タルモノアリトキカンニハドリヤトシテ飛出ン
一躍と云也

△あわ雪のとゝろゝちに消にけり

あは雪のいまたよくふりおふせさるうちに消ゆくを
此くれつきあまて行おふせすして消たるにたとふ

一葉野や

大鏡にハ市原野ハ貴布祢の下なり小町庵の南の方にあたる名の塚を云て望成す小町骨
とハ是薄なるへし

△観音の尾上のさくら咲にけり

後拾遺　高砂の尾上のさくら咲にけり外山のかすみたゝすもあらなん
青蓮云　観音といふにて山寺をとせたり

古寺やつるさぬかねの菫草

青蓮云　おちたるまゝつるさぬに

海士の家望よいこむやよひ哉

青蓮云　文治元年春屋島檀浦両度の戦に平家さとく滅亡したる
故に其の地の海士とも追福をせんとに

腰の扇礼義そありかの法山かな

深山にて礼儀つきこともなき故に

十如是

法華方便品

即身成佛

詞花集　即身成仏といふことをよめる

魂祭舟より酒を手向けり

青蓮云　湊に泊りたる舟よりなき魂に手向けよと積来れる酒をおこしたるに

平等施一切

回向文に　善導釋室義　に出と青蓮いへり

人くはぬこゝろ佛にたすらハぬそ

報恩経に比丘の群　ノ食ミてくはんといふを仏かのけるに是ハ雁王ニ不可食
とはする所三体詩雁塔風霜古ノ注ニアリト青蓮いへり

無とも寺のつくりかたうて　古寺の造り様ならず

衣着て又ゝふしけり一叶雨　作者の僧こさる故ゝコヒモトヒこ

千観か島とゝせのし年の糸　千観か島ゝ春の日ゝ夜の長ト云句考へし

藥王品七句　法華経の内ニアリ

花ゝ来て歯染みさうゝる社れ　三月のまゝおるもたるうゝをして乞詩の少き神社の祭こ

何とゝきす神楽の中を通りけり　志つあるゝ叶ゝるは祭けれみきくへきをなさわるしきゝ神楽の
ゝおゝに鳴ことよとゝ

君か代やゝゝゝとふきゝ玉つゝきゝ　聖代ゝ永ハくれることゝ玉しゝ永ハとゝくるゝ玉ゝとこ

青苔ハ君のまはひの如くとゝ色をしさ永ハ何ほとも　青苔ハ君のまはひの如くとゝ色をしさ永ハ何ほとも
とゝ

曠野系負外

完

高知堂製

此一冊 素堂の句解を摘録したる

丙寅 五月吉日 [illegible]

曠野集 員外

此員外ハ定家卿の拾遺愚草員外よりおもひよれしなり定家卿の員外ハ东

偏ニ つらぬ歌もとゝ伝ふるなり中別ましておけり

たゞ市中ニ居て朝のくもきを見ん　市中ニ朝をゝ史記孟嘗君傳日暮之後

過市朝者埠臂而不顧と有て索隠ニハ市行列有如朝位因言市朝とミゆれハ

單ニ市といふとおなしことはけ世塵をけゞされしゝ东四明のふもとに住む意

ゝ市中を意ニ入しさゝを云

东四明　四明ハ三台山ニちなんとかゝれよりやゝ叡山を四明といふ　ゝは江戸

の下谷ニ住ル此作者素堂す免ゝうゝけ云　青盎ノ意如此ケニ素堂ノ意モシカルベシ比傳ル山名ヲカリテ呼ブ イカヽ

花のこゝろ　こゝハ一ニ字衍ノ花さく比を云

佐川田喜六　清水濱臣大人の感心せられしといひて別に攷証す

虎の物語せしに

青藍いはく大学或問に程氏の語をひけり　これは二程全書巻十六にあり
此巻は明道と伊川とシカトワカラズ故ニ或問ニ程氏トノミイヘルナリ

猿を聞ては実に

青藍いはく　杜律　秋興　聴猿実下三声涙　自注に我嘗聞峡中猿啼
三声客涙自墮　今我在此聴猿旅情惨切三声正実下

狸雁の句をきらひて

青藍いはく　聖ぬか雁の句をむつて雁のあはれさをよまれて又おもふ也
孝云　発句素堂それ以下の附は野水荷兮越人のかきたる

人の車つゞりて

此序文を或人の尾陽のあるじにおくりてこせる也　車つゞりと云詞いまゝ考之は青
藍いはく　おもひけとつゞるをまらひしてかくいへるの

三人

青藍云　聖ぬ荷兮越人也といふ事なるへし　上文に尾陽の聖ぬ子の作みると有に
あはれに生はいかなる甲にか考へし

手をさしかざすは

夕日のてらしにまぶしゆくなれは也

うんしき

雲の上をはるく附けて用ゐるもの也　史記夏本紀泥行乗橇

ものあつくなる

青藍云　春もや、寒さかにある故に山中へおくり来るに也　和名加飲
食部麹蘗類ニ糀　和名加牟之　以案和米煎作也

門の名

戸口に名をかけしもおくり米うりに来れは茶うけまでとおもふ也

高知堂製

風の目利

石によりかけて月待ほどに風の免きゝして此秋は空行きの風ふくべきといかゞ
うらんと空打ミやる也

武士の

青藍云　おくより程ちかき山に武士のいつるをとらんとするに鷹の晨風をおそれて
山ぶかく巣におも居ておもふまゝに心もの有すまき也　鷹は羽をしむ也

ましるは

山中ふかきまでふもの羽れは取にゆきてゆるせしの山ここのしきりの道もへてと
ゆるしきりそのしきりをうつく瀧のきゝを遂たどり山とゆくをうけていふ也

代々より

青藍云　仲呂季の郡智の瀧のもとを見し心經よりしことえ寺尺書にこえうり

つみとふられて

はげ雲にまとひにぬれぬれは渚人とて經や紙より取出し筆の上におきてほ
すさまにお句を見せさる也

立ちよりて

用意の松明ぬれたれは大路に寄り荒るをかなしむ也

十句をなす其

小山は京に小山行さる山をゆき勸馬寺もその山に行く一の寺也　その房のうへさり
おそく取りされは松明をうたんと前句に引もとしてさる也

姥さくら

源氏君わらはやみにて小山の聖のもとに加持せとて行給ふ春の末なれは京の花
さかりはミな過けり山のさくらはまた盛也と若紫にみゆるをとるお句北山に本つく也

あてこともなし

花を見つるのミならす心もひもよらぬ夕月なと也

露の身は

春の夕もわうなしきおりから夕月をみて露の命を観念する也

秋きなほ　泥のやうに人事も弁せぬる物をいひすると　お句まつぶけ　はるかなる物　なるよ
　　その盗人の妻夫の盗賊をいふと　業をつらぬる　秋きなほと　秋ぶる　秋きけるにいよ〳〵
明るやら　やう人　をそれはせぬる形とも　ひとつうふ
さむらかるる　利根の川を工業したる荷物　なる　曉　さむく　形　おもうふ
　　けんくやうとかるをう　名
冬の日　照うとこれは又くもりて　雨気つきてさむう　形　利根川　ものぶもふ
　　土佐日記　廿三日　てくもりぬ
炭ゐゆく　炭の子のいをひまねらく　ふるふ　空のむすしきに立そんゆと
　　ふるてしくおもふ
ふら〳〵と　祝儀　ゆうん　空　ふ〳〵　ときの　塩　いなさけてゆくさま
狐つきゐ　奥をさげて　ふ〳〵　ゆくを　入込
柏木の　女三宮の　ゆ　逆　脚病　なり　怪　山伏陰陽師　なをめ　てとせて　か　持祈禱
　　すると　女の霊　なとうらなひふす　源氏　柏木の　差子見　うら　狐つき　見　をみなれ
さゝやくもの　病人　ゆきこゆる
月の影　月の夜　ふき　人　うち〳〵に　打さゝめきて　相撲せんといひ合すうきこゆと

秋なるより　新酒つくらんと酒桶なとをあらきものかうをたるその人さう取撲とらんとかふら
　　ふさまをいふと
あはしくれ　霜もしくれもいとをす形をつくんとてクくれるおいつ舟るのうめを歩行とい
うれとおろる　主人歩行　出給ふ　そ　おもふ　ものうゆきてかきくとく　不破萬作　秀
　　次公の　嚢　の小性　秀次生害のとき　羽死　したりと　青蓋　ひ　墨　出世記　東国太平記　諸書　閑　下　嘉
うこまる　女の謀　萬作を　流る　むせめ
火箸のをわる　まめ　女の　ものやた　ものを　所　うに　れい　物語の
うすもの　見せ　すまふ　なを　わき　に　丈　もの　を　わる　さま　ふ　うつす
あせきとめて　池を　あ　那きやう　て　池中の　ものを　とる　に　ちに　おもひの外　よきもの　後　され
　　人　あ　うと　かく　を　ミせ　と　人の立　うと　お句　て　ミる
花さうり　青蓋　とく　ふ　花さう　れい　て　ま　行　て　地の　と　する　ふ
捨て春ふる　奉加帳　おく　て　れ　と　花の咲　さめる　心　こきて　の　行　て　その　奉加　の　も　打
　　捨おくと
ふるさとを　ふ〳〵　入道せ　と　奉加帳　なと　去年　ふ　ふ　の　おきたれと　四月　濡　て
　　めてたきゆめ　て　道世　の　も　を　ふれて　おふ

大根きさらて　青菜ふとく春ハ来るとて大根きさみていそうしく入道といふ形をぬ
すゝ　ゝ

以上三十六句

○

遠浅や　深淵ハ引潮の底ひきあ取て杭をうゝ一ツさして蝋とるの料とする舟物を志らんる
杭さゝ　海辺尼すゝて酒かをんとすれとも求ふいくさを不如意とかけくゝ
きるの舟宿

のとゝや　酒のまとゝれも酒なくいつ日暮しされハ荷を解てをゝ初すゝ

百足の　山家といふかなるむのそゝる故に虫のきゝゝの葉なくとゝ旅者のさまゝ

夕月の　素なと焼をゝ夕月のすゝ出るを折ふやゝ白雲の分るかゝるをふ

初寒の　初寒なれハ旅行の料の蓑のうゝとゝに有しを引よせて行に引て月を見ゝ

荻の声　秋の夕荻の風そゝろさむくいく蓑引よせるにかゝ

一駅過しゝ　荻の風音つゝは冬けしき儒ハれい本所の埴屋の國一と馬ゝ春夏せて驛
駅ゆくもの有に一駅のゝ形らすけ馬ゝもゝ

道の巡り　宜祝ハ祝きとおなし道の巡りゝ中医の校をとよみて一銭三銭初穂ゝもとゝれゝもの有に
けゝ馬ゝ又古ゝうとつぶやくゝ拾遺抄ゝ卯月ゝさける卯花ハ志ろくもきめのむらけゝるかな

樂ゝる比と　その祝きゝもやゝ名けいゝを他ゝ評してさゝもゝなれの活計とゝ

いくつも　樂する比とおもふゝ家督とゆつゝ寸形ゝ我なとつゝて食欲の者ゝ

湯殿まゝ　青葉ゝ出羽ゝ湯殿山ハ大ゝ如来の霊場ゝ殿山ゝ屬ゝたり代花つくゝ俄分限の形ゝ神ゝ
いのゝ利欲のやゝうして代米やゝとゝる行衣をぬふさゝるゝ形ゝ

涼やと　その木帷或絵ゝ女ゝゝ

たらうさゝゝや　約束の女いきゝこねハゝゝかひつゝ形ゝゝすみて待ほとに立くゝれて涼やと
川ゝ端ゝもゝ涼ゝ形ゝゝまゝん

秋風に　ゝ男ゝ女車に附ふ髪をとゝ見ゝ骨菩薩　ゝひゝゝゝゝ詳ゝ

袖ゝ雲ゝゝ　ゝゝくゝゝゝ髪をゝゝ法輪ゝ慶庭ゝゝ法輪寺ハ山城葛野郡大井河の西ゝ
さて今昔物語ゝ法輪寺ゝ異ゝて法輪とのみふゝゝゝ例ゝ書盤ゝゝゝ

時ゝす　その人ゝ都ゝ物のゝゝ見込て浴外食物をゝくゝゝて花ゝ尋ゝたつねゝくゝ

八重山吹
青蓋云万葉ニ妹ノ紀ノ草とミしるわ志めし 聖一の山吹 又八重咲山吹妹ニ似たる草と作さては一重を八重立と見なし八重をもえちぎりと見立て俳諧姿心抄子をいちをもいちと改らわろし
八重山吹ハもふたたもかれいふ人多しハ昭和之今ふハ何の心得ひ光之 世をも忘れいる佚氏のさま

日めいてや

心やりける
ふハ何光と工夫のあら隣より土管ひて入口の地形を直すと之

向まで
小舟一とハ土管之

埼離く
人このぬきおくる衣服を小舟まてひとり番をける之

配所まで
配所子まれの昧おほ志おさらまり千鳥の取始末をしながら番をける之

声うらふくる
ほそき声まで小歌うたひて千鳥の女子とを之

むく起り
主人ハ朝ちやくおきひつれて すねける歌ニ歌うたひて仕事をける之

門を追り
主人たくおきに茄子うりてよとおほせられハ之

いまこミね
青蓋云 町人も人こミに住む藪うつき足軽町を茄子売の通れハ茄子買んとよふこむ之

高知堂製

おもひ逢うう
入込の取分れハ他宗も多く分らくきに分けてお題し京田流之とよふらん之 一句宗ニ高田流ハ云なり

盃もてはる
お請ニ実ノ入て酒宴まうけられしとそ之

ある秋の
酒の相手して酒すゝめんとおもへと病后所れしを之

つまくらも
今病ニ伏したるハ燕の巣造りたる春も此頃過き燕も去り秋之頃らくてつらからんと おもふ之

小志ほちわき安房の小湊
お句容ニ巣造りし燕もみなさてはもやくふすはとおもふ之 此小湊ハ日蓮上人出生の地まて小湊山誕生寺といふあり その寺寮の僧も見込んと青蓋いへり

夏のりや
青蓋いはく俄の雨ニ逢てありきし小湊まで来てその雨やみおもふひてのどうるほさんとはまる海辺とハいふ所ろ成志ほはやくて真清水ほしやとおもふ程に雲をれて泥の夏の日まてりつくさまをいふ之

桶のうら
俄雨ニ桶のいろをうつされ道具形と取らへしたるか又雲をれされハ今しきりをおもひ元禄の頃ハたおの今をうつすといふ之と青蓋いへり

人なミね
桶のうらのくろみ止めて人ニさそはれてわきさし形とさして花見にけると之

つひハつくりね
なふハ精進ける日を花見にられてハつくりを喰て精進落しすると之

以上三十六句

○

うつくしき鯰

青藍云 鯰のいきさる流の水際 柳の枝子蛤蜊の卵なりと云 東華細目に秋乳子作 房粘着枝上ニアリトソアリ

柳のこゑ

夕霞

青藍云 なつかしく思ひおきし涼柳ありて立つさまをこれハ夕べに棚引のとけきに蛤蜊の卵な ところえてまかのくなりなるさまを云

ふゝきやう

お句の夕霞をうけてその名にけふいきやうに見やるを云

秋草の

あそびの外子おほく咲出たくをつぶ云 二、句ハ今俗にいふモナイト云フ云

弓引とらくる

青藍云 秋草の咲こぼれるなる野辺に辻相撲有てその向力勝ほこる気つよしと云 是ハ俵長のとき 宮地脇右衛門といふ上手に持ちこたへ中角力古実記と云ふものニ有

ふてまき、

後ひこうじきもの道中に物ひろはんと立出ニに辻相撲ニてとび入したる勝てハあそびし まにえらを得よしと云

たまく

物拾はんと立いでたる砂の中の木のてかしまといふ云

火鼠の

おう物をいつぬふことの有をうけて竹取物語なる故事を引出ゐると

なすいふミせしと

その皮衣偽物形なハあらく燃しつくやしなミハ取ろくをまきらしさると

高ミより

踏損 たつの形しさをまきらはさせたいと云

酒のなのもに

青藍云 そのさまきにおとろきいふさまと云

幾とせを

青藍云 酒宴の興ニ人ハ順礼を旅の中に出なくさむをその中ニ順礼をせぬ下戸のその座の折合わけれハ膳もちて次の間へ中く云 いくとくのも順礼もせさりし事と悔するを云

よまて双帝の

諸国の神社仏閣をミてよく順礼せし以年比をくやむ

なたらすて

その俤を物案しする女のなくさむやと打ミるさまニ見込てその女うつくしき顔もうらしめて有よしと云 以下四句狭衣物語 飛鳥井姫君ニ因り狭衣物語にくはし

月のおほんや

灯よ手をおほひつゝ

数珠かけて

隆辰を入道ニ

和泉式ニ高三隆辰といふハ日蓮宗の僧なりしか還俗して小歌の一流をうたひ出すと 花葉記といふものにミえたる その格室隆辰をめて小謡をしなされた隆辰と

八歩に声のおとろへ〻数珠を脇息にかけてかくの涼あるべし

十日のきく　六日の菊をおなじ趣と隆辰は是をおなじと世人もてはやされぬるを

山里の秋　平山さうなすくなき山里は生駒うりに暮れとゝをひゆもすきたんハとゝおのあめ色さ

つきくのゝ心をつけ〻ら

長持　田舎人の長持を買ひてくるゝ道中ゝ買てくるゝ秋のまつるゝ世

ざぶ〳〵と　そのさむき比長持買てうる道中流川をとる田舎人のさま

馬のとゞれハ　月影ゝ馬ひきてうる道のなかなれども馬ひきてくら立る声かくれ馬も立る嘶と

さひしさハ　木曽街道美濃不破郡垂井の宿冬のあふる比馬なるハ人と嘶くさまは何ゝくの

むしろふまて　青蓋云アツバ今アフルト云ことゝ猿蓑ハ笠あるゝ柱すゝ小風のうちアフルト云

蕎麦の塵をうつ人と云ハ甚ゝおもしろ　ゝ　ゝ

を　の端を両手ゝ柱てうふきて塵をとるさまゝ垂井の宿雨ふる日の内仕事と称し人

ゝうけいうさまゝ

つく〳〵と　貴人のめ或業の根底行の局をつゝのたゝ式賦のしてさをミてうゝやむゝ身くらし

けれとそのくやすゝ市ゝとゝ

暁ふる〳〵　おなじ才のうとゝきまゝ提灯品をよむ女人成仏入信極乱ゝ

けしのをな　浮世ねふる〳〵世の無常のさまをゝ

味噌すり　けしの花のもゝきさま蔵なるを味噌にすりのひゝきにけしの花ちる

黄昏の　夕飯の料ゝ隣ゝ味噌をすりけすゝ入口ゝ薪ゝ多若ハ

次第〳〵ゝ　日ゝ〻ゝたなれハ行ゝ日さするにも寒ゝ行ゝ便ゝ薪ゝ多ゝ

春の朝　次第ゝ行ゝ〻ゝたなるゝ朝ゝ供ゝ赤貝をきゝてあるゝ江戸ゝ常ゝ迎ひ

顔ゝ　親ハゝれのをしゝて春の旅五中ゝ〻ゝしてゝれハ赤貝をきゝてゝ行ゝのゝをなくなれ〻ひ

ちさらきゝ　板ふゝく漢布ゝ板立ゝ心のうゝて又ゝ多ゝくゝ〻ゝ

そう面ゝき　猫をこめて旅ゝすゝに山路ゝさしかゝるゝ旅ゝ山口ハ山の入口の象ゝ霞ゝ

以上三十六句

○

ちきり　[illegible]

雨の弓柴　村雨ものえと弓柴を植るとりて人の戸口にすみて実ハ木なるものゝ花やうとなんをのみをふ所にうゑ世ゑ鳴きそ

引捻　青蓋云カタギハ其車ヲ守リ外ニ動ヲヲ女房カタギハ已ノ妻ニノミ商賣カタギハ浮世ニノミ　さてハ琵琶カタギハ琵琶ニノミ　俄雨ニて車ヲ付ているものハ[illegible]若草の下に行ミ居て引捻おきし車の中の人つるを人にいひあつに琵琶ものゝ底より長袴ふ人と

ゆきすがら　車の中みそのを形ゝてきゝて

月の秋　旅中の月ゝん為ゑ旅立人をゝぶることさうあるとも人のうらゑ

一荷の形ひ　木くらけを一荷ゑ[illegible]ゑ　秋の朝雨降ゑ[illegible]ゆきてうゑとてなる

初ゆし　長谷寺ハ白瀬山ゑ[illegible]ゑ長袴ともう木苔を山ゑ[illegible]ゑ

菜畑　その僧ゑハ畑中をふミちらゝて通ゑ故ゑ畑主遅ゑ制ス

土肥を　青蓋云傳心録ニ土糞ハ畑土ニ糞汁ヲハキ干ヲ貯キ用ル物ゝと云ふ附ル意ハ土肥をかきゝ[illegible]長ゝゝなりしも畑中通ゑ[illegible]

印判おゝ　ゑ土肥ゑきよせ　[illegible]

通路の　女のもとゝ[illegible]路のついゝゝ突[illegible]ゑ[illegible]ゑ通ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]

六位ゑ　その女のもとゝ物[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ

〻〻人と　清盛云者任せる老人の妻を同しくるの落ことこらは妄常と今ハ五千年明女郎うハ相應
多くしのひすもなれい老人の つまと那れとむすしの妻を妻ハ　ねなまめきいるすゝのこのき
つもりをてうけうわすれゆくこと

柄杓

夕さすらき　いえれのいそうき時まて酌して酒すてゝ　傾城の名殘と

駒のやと　八月駒牽と信濃ハ甲斐ハ出くらをたたこやまたたそ　ハの駒牽のうきにし　板者の下女のもいら
〻と

秋のつゆ　その駒牽のもとも　逗留中と若の浄瑠璃をうつて日をくらしと

急てゆくも　行ゆくの　あるてゆくしにさうまと　才浄瑠璃うらを　ゆくに　見ハ生見魂のことびよ
けれたくは興ゆ世と　ゆり　評すと

八月の月　上弦の月入をて　世まを酒　易ひしよ〻

山の端と　八月ハ　多人とれるに　木高き　檜を　榎とかれるに　ミゆる　ホ雅ハ　樅　美トアリ

きつきたもこ　いとこに酔てくうくれれを　松と樅とうたゝこゆと

暑き日や　ゝにもつき夏のひにつよきたをこのむ　故みくらくして　堪こると

高知堂製

大数ゝき　その　つきひき

こゝろゝと　おゆ〻大数ゝ　葉ゝ　ゝのつゞゝと見ゝ　草花ゝと　ゝやと

兼ゝての　路用つゝきゝて　木賃のやと取ゝう　川留ゝ逗留すゝに　ゝのゝ　ゝこの　ゝ　ゝをゝて

思ふも　世をしのぶ　才も人ゝうゝん　兼ゝ　ゝ三年ゝゝを　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

庇をつけて　まをしのぶ程の　假住居　ゝれと　住ゝ　ゝと　庇を　ゝ　ゝて　模様ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

三方の　庇つくるものを　初夏　祝主と　ゝて　ゝ　不用の　三才を　焼すつと

供奉　ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　供奉の　ゝ　ゝき　検ゝう　草鞋を　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

段〻や　おゆを　花の　巡覧の　ゝ　ゝ　見　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

人おひと　ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

○

柄をすこうけよき　下にミゆ

宗鑑　山崎宗鑑ハ近江源氏ゑ将軍義尚公ゑ使奉して鈎里ノ軍中有しを俄ゑ義尚公薨ゆ町浮世のけぶりを観し遁世し摂州尼ヶ崎ゑ居庵ゑけ申新茶宛ゑミえうと青蓋ゑ

月ゑ柄を　夫木九夏月ゑ夜ハひうすしくすむ月をゑ拘ほゑうちハゑ

夏のよの瓶　下にミゆ

蚊のをゑ　一刻千金の春宵ゑまさうんを

とつくりと　蚊のみの瓶ゑその糸ハ冷く酒宴の折も

おもひもよらぬ　おもひもよらぬ風吹いてたれハゑうの物煮おきゑ

ゑとゑ

真木柱　青蓋云　積気あさ一人とゑうゑ居ゑ物しもおもひもなく風ふき立いてゑゑ

使の者ゑ　浮舟の積気ゑ他ゑ使のまゑうを待すゑ

あれこれと　その使ハ約束の猫のゑとゑにおこせゑゑ　それがゑゑこれゑうゑんゑと云ゑ居ゑに時刻ゑうゑて使をまいすゑうゑ

猫のゑとゑ　あれこれとゑうゑ居を他ゑ詳してゑ

くしくらまそ

とこそやら　おゑくしくら云ことゑふきけてゑ一きひうゑうゑもの有しゑ物おもひゑ

ゑゑゑこゑと云ゑゑゑ

蓬の賀

おなじ祝をうとふは老人と又は延年の舞とも云ふ其の名の筆は氏老人の書とき故なるべしとも云ふ

花のかぐは氏の書の名をかりしなり

着もの

なすなのうらまきに袖をぬくはんとしるに浅間茅舎の糊こはきをしる

うちむかせ

浅間茅舎さて塩干尺よりたちのさえをうく

砕き点

犬の声とゐふとうけとりすぎ犬の声ーれはめすんやまんと犬ふ所も門口にお

とつれをゆエ入犬のゆるらかのまに出日き故ゑとふさてその人孫うくのうち

ゆへをひりて

塩干尺ゑと門ゑうさえ（いそこに犬居て見れめ人をほめうゑ）

たゝ志つなる

その砕きあもやとの主人とゑ近一屋おそくかゑは氏ゑうすのあるなゑ（とふ餘情なり）

歌あきせ

むう一六百番歌合のけ使たまの（左右の人と（第一つていらはちゑくはゑ第ゑ人とゑ

題昭と寂蓮とゐ毎第ゑ題昭ゑ獨ゑを持寂蓮鎌頭をいて論ーゑゑ氏の井蛙抄

六ゑ三ゑゑ谷川氏ゑ歌首ゑ僧花ゑ就ゑゑ蟾蜍ゑふゑ水ゑ三ゑ驢首ゑ三ゑリトイ（ゑ歌句

ゑつうなゑ両とあるをうけて歌合ゑもめゑうの面白しゑ）

その歌合ゑ出家まれゑ料理のむつうきゑ）

き鬼立の

灯臺の

其所この混雑を洒ぎすてもかくおくさゑ）

臼をおこせゝ

それもお句と同ゑと混雑の所）

ふく風ゑ

ゑのこの葉ゑ狗尾草）本草菜名倚考利洲坊ゑゑ氏草の生ゑゑ軒の下にある臼をおこせゝキゑ

きゑ氏の花ゑゑ）

半ゑ

おゑのふゑくとゐふゑゑ氏山を取くつーたるゑゑのこの葉の生ゑゑゑて秋風ゑゑゑゑさに

見辺）

むつくと

親の代ゑゑゑ身代ゑゑくゑ衆やゑ庭をゑゑをてゑゑゑゑけもゑくゑゑゑゑその顔のみゑゑ

似て居ゑ）

人の請に

むゑくゑゑてのゑゑゑてオオネ者ゑれゑ氏人を目ゑゑにするもの孑孑ゑゑ人ゑゑゑけるゑゑゑゑ

ゑとゑ）

ゑきゑくく

青蓋ゑ人の請判して雑義するゑゑにゑけゑかくやゑとゑれて氏や蓋やゑゑゑゑのゑ

とゑゑゑひゑくくゑ易くゑゑゑ自負ゑゑ）

千せゑ

おゑゑゑなゑびゑゑむゑゑゑゑきに曇を立合てゑけおきゑゑゑた（ゑきゑゑゑゑゑゑゑゑん）たゑくゑゑ氏）

ゑゑくく

小請ゑ信州佐久郡ゑ青蓋ゑゑゑゑくゑゑの請ゑゑ孝ゑゑゑゑくゑゑ（ゑしゑゑゑと孑ゑゑゑゑ氏ゑ

歌ゑゑゑりゑゑゑくゑゑゑゑゑゑゑゑ

皆同音ヨ　善定寺氣吹の同行神の形ゆゑに異口同音ヨ念仏ちゃまヨ附ろ

百万し　百万遍の祝子ん夫ヨわれ子を以へたれすまなくて狂筆となり寄わけくるもちろ
も嵯峨尼迦堂の念仏会にあ子にり会ちりと俳諧世心録みえ百万遍といふ所と青蓋い
（りお句の皆同音とふを嵯峨清涼寺念仏会ヲ見込ム

田楽きれて　念仏会氣吹多くして市中田楽賣りらり〜これも〜無當持り故ヨその地ヨハ
田楽のみ出行も那〜と

以上三十六句

○

深川の夜　翁の奉ヨよめる故ヨくいろ〜

序　平松茂峯子云ふひとかわふひとと云深氏夕歌ちきかふ鳥のかゝ声ヨ形きこと
季吟ノ説ヨう声ハうぐいすと

酒ヒ形ら　翁ハ下戸ヨされハ此句ハ又翁の句ヨ酒の色〜〜神れぬ夜の意と云ふヨそれも
れ〜ら〜青蓋ヨ

為ちゃま　青蓋ヨ和名藤蘭布知波笠薬青蓋ヨ蘭トイヒテ車足ハ〜キヨ離ちつ〜〜為神
と名つけてめてつらんと

理をなれ人　おヨのやうヨ興ヨもハれと理形しに秋ハの形と

甎簟の　荘子　穆王篇我大氣之積樹之成而実五石　青蓋ヨ甎の大なと爲て米穫みすると
為と者の口吻紹鷗の甎ハ竹ヨ米形く又翁ヨ四山と号ヒ大甎ヨ爲て米入るなり俳句
理ヨは形れいう秋の竹れヨ感ヒる庸人ヨなるす只五石ヨうの米入甎簟ヨ米
なりとの意と

風ふれ　利の〜免ヨ左西ヨ奔走し風ふれて市人の境界ヨいとれむと云ハ隠者ヨ
て不自由ヨ自主ヨて幸ヒらめ中ヨ形くて心やり〜と

なるこも　白氏　長安古来名利地ヨ中ヨいとひすてこら隠者の風情ヨ附

鑿のおほき　都ヨそふ隠者ヨられヨ都会他の鑿者のおほくて目まくるしと

いそうと　ゆきれに鑿者の供先ヨはるる目まくるしと

ひろせ法やく　寺の住持ヨはるる法住のゆめに世法人ヨ椿象ヨする師走の比の形と

比里ヨ　玄蕃ヨふ名ヨ古くよりふ〜たる郷ヨおの主持出て法住の世法すと

ひろいをうせめ　玄蕃ヨの所ヨ指蔵所ハ和の所ヨ使ヨ法ヨ小前の者ハ所ヨいとう
せ者と〜青蓋ヨ俳諧十論為弁ヨ俳句の中ヨ為ヨ為ヨ云ふこと所ヨ

きぬ〳〵や　なえやえ　ながきほの貴人　女のもとより　えらびを供もつくりを　せめと

舟引き　きぬ〳〵なれもろ　佐ふ男君　うけそなりてなれの上風や引佐ふ　その風声

うつくしと　ひめ君の女房　うきいふ

風引佐ふと姫君と見成　心地そこなひ佐ふ故おもの多さ

まもつる寸

やんこと無き姫君の紫　すこうに見込

物ゝそくさき

船中いそくさき匂ひ物すこ　ねいる

琵琶の湖　姫君の湖　比良の高嶺　北にたつる是を近江富士　郡にうあ匂の

月と花　比良の

ひはさ（つる比ハ　てゆくさま

雲雀さへつる

書ちらしたなてひけ物　形くゆる

肌めきてなきさき　比良の高ねをふまえ

破れ戸の

見せのさひしき　見せのさひしきにやれをを釘うちつくこ

見世ハさひしき

挽劇　おくこ

身代　内室　鏡の柄　ふくさにつゝ

家なくて

お匂のまつきを神おと見込　ふくさに鏡をつゝ形うに物ひのさま　恋の情

ものおもひ

人去て　況法聚劇の中ゝ神ゝ有て女ゝ罪障ふかきを　仏道ゝ傾向し　説法の座ハすゝ

きれとは神ゝひらゆて　初ゝ　青蓋ゝ法座大鏡ゝ　座ハ

お匂を初瀬堂見込　法法すみてさよひハ堂なこもんこ

初瀬ゝ

おくゝきに　俗文ゝ　嵐のゝ　ゝきたゝ　きくこ　西行ゝ　ゝきゝ　ゝきゝ　ゝもゝ　ゝ初瀬

の山ゝ　ゝ　ゝ　

いの先て〳〵　てるた入中よ　ゆえ〳〵　瓦次のくすりや　初俳そん　文字をとひるくらすと

馳走ぢら　菜だへ　ゑい　菜買ちくる　病ネ　見をくすりの妻かくゆうて　奔走ぢに　盛角と
やせて　ゆうねハかひなくおもふ

花の太後　その子のもも世間をなしもと見の病ゆおのれ　後義　も出来ずすもと

田ち　田ち　冷てにくさ〳〵と人ささえとりる　後義をよと

江上　三十六句

○

翁ゆ伴をれて　めつらき　趣人まさけは　其角の家ゆ　翁の越人を　住ひて　来り　此詞書　其角

落着ゆ　五人荷今ゆ清風を　つ〳〵をよ　ろふ　古今　秋風ゆ　初ゆ　金をきこ　四月ゆ　ろ　ゆ

つさを　ゆ　てきつる

三夜さ　青藍ゆ三記　待宵　名記十六夜　ゆ　越人ゆ三記　雲無　名つ　さの　張氣　ゆ　ゆ　三記　つ　ゆ　ん　ゆ　三記

菊萩ゆ　ゆ　ゆ　月ゆ　ゆ　ゆ　の　花　ゆ　ゆ　に　置引　ゆ　ゆ

高知堂製

のこて　ゆ　ゆ　ゆ　その混雑ゆ

誰ゆ来て　芳のあるを　ゆけと　ほ　ゆ　ゆ　ゆ

酒うまき　女の竹と直して初鹿さてる顔つしとれる大傷の涙ながれ一夫の心ものとと男にかきくとく きまに取成と

奥をとつぬ　女と二人舟を釣る出られと酒のこ形ろ奥をつるすさをとをてみきさま

そめろの　辛都浦小町塚山八俳黄と隠家の　江上る舟を泛て奥をつる子こそのれる不二山をかやるに あさきにこゆ々ゆ〻きと

花とうこら　不二山の俳黄ゆゆるるるあきさまを見て花なりと瓶ゆ草花をさしてつれ〳〵をかくさまと不二山の ゆきを称美して初こそ桜ゆ乃うれ見て花と瓶ゆさたるやうるおゆをこけて山と

饅頭を　秋の花〳〵なくさを見の料ゆ小女ら花とさ〳〵ら一瓶ゆ感饅頭を穂美ゆとをををかくるるる山うし

うきたつて　こ者の為ゆ供養の経歌とを之

西王母　うる仙人いやゆ目ゆこ見ゆさらつるく浮世ゆ苦労ゆ小拾之ゆおゆをうるる

すや鸚鵡　物いふ鸚鵡の才とゆるるゆ者世ゆ侍と之

あちきちや　あぶ中ゆふたゆ心ゆをきて夜のつまを入口のゆはけゆれ急ゆ開すると　ゆ鸚鵡ゆ 客事をまて発覚しゆを天宝遺ゆに乃今ゆ鸚鵡ゆ人ゆ乃をとおゆゆ

うけてこる

恋のおやゆる　衣のつまを戸ゆさゆさゆれて乃ゆきゆくゆるゆ之　妹ゆ人を恋のおやゆるゆゆこ 引たゆゆ之

やゝちひ寝もしゆゆ　足ゆ角ゆこゆゆ乃ゆけて乃ゆゆ蝶を高ゆ之ゆ高ゆ之ゆ定ゆ之

米つく　ひゆゆゆす夜一夜恋乃ゆ乃ゆ乃ゆ月の為ゆ米つきゆ急ゆ之ゆ乃ゆをゆめて乃ゆ者の乃ゆ ゆゆ十月ゆ之ゆ乃ゆ之

夕鶴　為ゆそれゆゆ乃ゆ乃ゆに宿長ゆて腹ゆゆ乃ゆ乃ゆ月の料ゆ米をつく者のゆゆさゆゆ 師走ゆ乃ゆ光陰をおゆゆゆゆ

いくつの　同行ゆゆゆさゆいくつゆ乃ゆ乃ゆ荷ゆ強力ゆゆゆの乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆに宿ゆ長ゆ乃ゆ腹ゆゆ之

穴いちゆ　意録和名抄ゆ俗穴いちゆいくつの盆を持なゆ持強力ゆれゆゆれゆゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆに草枕ゆゆ 之ゆゆゆゆ

弓すゝけ　あやの好よ形見より負之の旅をうけてまとふ〳〵のつきうけの竹のすけるを云
弓ハ形状より云

道をふす　あやすゝひるつきうけのうり乞食小屋と見立

ものきゝつゝめ　乞食の鎮守の小社のうゝうゝて園をとる　これハ旅人馬のゝ人とゝぶときは
園取又すると

花の香ま　旅人の書旅公竟よみとり形るつきつき鈴を着る酒の〻庭中の花をえつ門る事
居ゝる馬士をる里数きけと園取さるゝくゆるめさまに附いる

むゝろ敷へき　嶋倩ハ尾張名所嶋海星崎嶋倩とつゝきて名取之嶋詠まて〻〻きを見
てむゝろさ形ら一用意の酒着つゝろき腸形と取きゝ花の香もとるし
に附ゝる

以上　三十六句

○

我もう〳〵　酒盛ノもう之　我ハ新酒の酒盛ハせゝと之　新酒ハさゝやゝし風新の句

秋うゝて寒し　あやの形酒ハもし形と代句ハ秋寒る湯嫌のさま共ま一癖之とそ

月の宿　子ゝあつゝう書見のつれゝ陽あしすゝを陽嬢の人ハひゝう書籍を
引数居さまゝ

外面菜の　面ハ誤そそ手ゝ彼のむゝなをし四と菜芹ゝ志ゝう〳〵鈴麦のゝ之ハれハ外も採菜
形ゝる形ゝ　おゝ書をゝ引ちゝとゝをゝけて書籍中ゝうゝいゝわゝて居ゝる折
七月なゝうゝてれハそのゝ月ゝ乗て外も菜芹ほゝるゆゝくゝと之と青竹笠之

をねゝひて　菜芹ほゝほゝと馬ハ乞ゝ乞ゝあゝけと乞ゝ飼の馬とゝ居ゝるとゝわゝけゝるゝと

川越くれハ　おゝ句馬のけゝ友をゝけて乞ゝ飼の馬とゝわゝ方もめ

疱瘡貌の　川越くれハ七歳の女田食めの風俗えくゝに城下に跡もゝゝしゝとゝ乞ゝひゝつ来ゝと者
句をゝくゝ

唱歌ハをゝ寸　その女ゝけのゝゝひゝつゝくゝ

なゝゝゝゝゝ　七女をふ男とゝをゝれゝ〳〵ゝゝ形ゝて沿雲のゝゝく形ゝれゝとゝをゝれゝれて女ゝゝなう
ハゝゝ

ゝゝゝゝ　おゝ句ゝをゝれゝくゝと男ゝ
ゝゝなゝゝと之

今朝ゝゝも　おゝ句を男の女ゝ乞ゝ乞ゝれのゝゝと見込ゝゝ之

行燈もて　浴衣容色を油行すらを生入の浪人手傳ひ寄りて徐是もて絡ひ行燈もて
えてのつれ　有徒を農家ひ立入て働くうす浪人行燈もて之所硯ひうちもれ之とたのむ
着物を碓ひ　さまに附うと青蓋ひ
明日ハ髪そら　あれハ入道色ひ之那れハ月影の面白きひ砧うちてきうせまと着物ぬきて
（この世さまま）
おら露の　夫の死別ひ妻の悲傷して明日ハ入道色ひ之　世容ひ別ひて共に泣居さま
つれなの　死なくとなけくあまりに磬者の療治のひとかさるとうしむ
ちら花ま　入相のかねひ花ハちりゆくひ磬者の心ときくこうめきうしろすうらよ
と附こ
よふこ鳥　数花とふくり春の名ひみこみ〳〵ふき鳥のせんさくに永きひしくれるくにたりし
青蓋ひ比春ひ附ひて下翼す半歌仙を表けうえ意を翼すいこうを取こ
以上十八句

○

初雪や　ひさうふりこう雪ひて地上ハ三ふきえて相の葉ひのこ

日の経きと　経おきしたるこうり　比大つ書をこむさうこ
山川や　星ハ経ちやしおきくハうけしうこうるまこ
賤をい　都ひ久和れぬ山川のけしきいとうるう遠くこやんハ賤のしわさ鶏の水くり合物ひうる
おすふさり　和とルすしうしと貴人の遠慮ひ依ひ所うう
山義ひ月宴して世ひ会てくえひれつを　芋句田舎の住ひの附こ
ひうすいとくし　為仲住ひ之の作ひける時こやきこの萩を表穂ひ合ひ入て持来りしと表明ひ
無義ひうり比京ひ作ひを人と都ひ露ひ見物先とおし合いし合くたれううと
川越ひ　ひ京ひ作ひの人足ひされとうもかとうる表穂をあとくしといふさるこ
ねをいこう　比人宝の中ひこ
わかせとを　老かい男の未こう折しル人日しのふこう有てこのいあくうんと後のとにとふひ
比男ねわといなれと顔老ひるくくかるくさき
すうき　今ハ比戸吉原所ひ小すきと以ふ三味線をひくこ源氏物ひ紫ひつきを引きて芋句
藤ひ下ぬひ男かすすなあだくしき雅埋ひてすかかきひとちの色めかしきよりの仕わざ
更ふよ　閨中ひ夜ひ夜更たるけしきこ

こそ〻おこす　中まゝ僧をおこすなして

峯の松　おもしろきけしき見出したれハおきてこゝと相傳をこそ〻る

旅するうちの　旅中ハ歩めの累日なく

亭ハ玉子　四鄙の人利潤をのくはらぬさま

下戸禁ゆく　玉子あきんと下戸ハ禁ゆくと見而亭ゆ庫おて なきこゝ玉子うる不ゆと

耳や嵐や　玉子ハ亭ゆ庫より下戸ハ玉子がひゆく又老人ハ耳もきこえ歯もなし水と見角老

具足免させ　若殿ゆ具足免させる扶老人とこなすこ歯も耳もなけれと為ゆ数ゆ為ゆ子とこ

いつやらも　具足免させる川途中おて爲きて從者ゆとゆ強ゆ

山伏住て　はおとゆ学なくきゆんをゆゆを山伏ゆ居てゆくゆとえゆずゆいゆこ

あらくと　米車ゆ轅ゆを依めゆるいおつゆを助ゆこゆ爲て有ゆこゆ大やと引てゆけと山伏

挑灯すきて　道ゆく人の挑燈をゆゆ引ゆ車のくさひゆをゆさゆとゆゆ内ゆその挑灯ゆき過て跡くゆくゆし人

伊事を伝けん　髪をゆゆ女ゆの挑灯ゆ過てくゆき所ゆ伊をゆきゆゆゆゆ

ゆゆく物も　伊故とゆ〻ゆの子ゆ伊ゆゆゆ

ゆゆのと　女をゆゆゆを馬ゆゆゆとゆるゆゆゆゆゆ

のゆる行中　女のゆゆかゆを馬ゆのゆゆゆゆゆ

乗もてまわす　なひてもらひたく送れる手紙の乗酒をあくまで万葉四いろ（の人のをさせる吉備の酒やも
いまくしぬきはたもうん　聖は乗酒有と本邦にはきこえれとも白は西土なりなミてよめ
るれハ乗酒と書て吉備わうり色酒をんとつて是は万葉の上なれ　つまり

朝ごとの　神前に乗酒奉るさまをいふ

消ゆる　朝ごとに神前に奉るもの花の咲出いるを消ゆるとなり

春雨の　大和歌うすものたつふくるの時を通り過てそれか咲出る花を見出したるなり　平野郡
る　摘蕨峠の誤てうかりと云ふ　わしけりて道くらかりそれいうかりとなり
袖ぬらろ（と　峠を越わかりと平地なるをこそ此雲雀ぬらろ袖にわろを俗す

以上三十六句

○

一里の　名うりして寒気をしらぬ人と共に雲中いとを貴きくをつるべきこと

すけひの　貴賤の辛苦を知れい隠者の住居の風情をミせること

さきくさや　色ふかき山家を松りと見立まきやさくさや引やりゆうくとさをひく来ること
さき草八橋ことふ　北国紀行にこそ　枕冊子橋人ちかこそれの形をこつてまの
ちり酸つりし残り山家集　まきまわる地蔵ハなくやを生めら人村さめすきぬ
の山　冠蔵寺ヨさきまつり　正木のことをあくと附録なり　以上書盈いり

肩きぬをろし　堂宮たる林木をひき初て信者さるいとを中に肩衣きたる人とりて場典をて
交りたる那れハ角名のはる小

名月の　酒に酔たりる人名月の人のたとやき塘陸を通りさぬる

た　ら　郷子　塘陸とふより川巴に俗を奥とる那住を見出したり多分に形数あくいてく

里ゆく　二三日出守をておとり教に行るすし故にいろくゆ予おほくたすりていをみしく
俗に郷をやたらにつみ込と

宮司か妻に　踊教に行るすし時に日ハ小ちゆ小ちゆ

問えれて　ほゆられたるをつらしとおもひ（とさすかにわれ物おれ十二

つらとらきて　遠方に近親ちして紅葉ものつらに入消息係にておこせをいらき
こしてあふるをを人ハをらわれ何故とふ問ふ云ふ云ふ自て物いはこきよ
うとくと　名の使にて夜中ハら来れハおとろきてひらくこと　十七日湯わかせと
いはてを海心ちくうとくと丈形をおこまこ

寒ゆく　北国雪深き所は夜ごとに起出て始めて書はねぶることなり茶を煮るの
はしさまち所なり

なるもよし　その雪始めすこに一人そいにに会はねば庭人するに人ばかりてあるこころの云
つくるふよし

蛤をい　海女連ほのぼのとあるこころ

浦風す　その女海に吹くる浦風をてとひて清くこころ

こころうら　浦を和歌の浦と又迄此舟の内を乗清て今夕風清くこころ

ものく　さ矢射を見物するさまの風雅をこころ

ひくらふ　さ矢射人のちぶれひくさくて遠くのこころ

きるあくれ　初冬人こころを尤まけわら人とおよび近まれひくさくて遠さ
かるこ

帝子の居の　帝と袴の居と城と言て初冬くかく作とこころ

を所すす　此人貧しきなれば潔癖の人いく居るを況

座敷ほと　その際癖のものさまを以ふ

木をさく　木さみそ枝をすりこれ初冬くかしとひて妨をこころ

稲をこのる　その枝葉の人のこころて人

此年をこのて　その人の中のよほと世界目ちとなる老人の作人

まくらもせず　月前の仙洞なる北月中尺の食のけとなりと自慢そこころ
たゝわすの老人のさまこころ

暮過て　秋夕の寒き此障子の蔭のこころ初冬

こきこころやうに　今はもやをほみて尺こけもかき荒れ障るきたの前の氏
障子のけにうくねれこころ

内有粉　入道宮の源氏屏書をさ為雪の巻に入道のきさの宮素のち色なる
やうにたる世俗ひて三月尺と重く形を俗ひ初れ尺ちきの木帳のもに
きこゆ　ふて御ぶさまのとさ見きく人ことひきく俗ハ尺こきうう侍てこまのに

衣引ふる　ものつふもうるさくお尋ず故人の行一枝まれハ衣ひきこるず俗こ
巻にはよくこれ衣引ふる　源氏巻の

蚊と　おの句藤壺のとつらひ侍りとまりのとつけあ故にふしてうとつ病ものを

庇風にちて　炎暑のころ一つわたる病人涼風みたる時なり

枝ゝきて　庭中に多く植ちらし（きてをきたるを夕方の雨にめらさりと取入さま）

をねのめけるる　唐丸い鶏の一羽をゝ枝ゝきて蹲竹もきに庭丸うえこゝとをたくを

うるさくおもふ

ぬくゝと　元景まちと叶刻のしれめ分庭丸うは（くらふり）もわめけれと庭

丸庭丸とあとさま

尺ゝ寸　伸はみゝとおもひつくゝられい蹲蠟う限もなく笑ふ（ふ）て有ふ

以上　三十六句

高知堂製